ミーボ改造計画！

揚げ玉ねぎを好きになろう！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

致死率１００％の鉱石病を治癒する企業ロドス。そんな彼らの乗る移動拠点ロドス号の内部で大事件!?引き起こした犯人はカワウソロボ「ミーボ」を操るオペレーター、メイヤー。普段から素晴らしい能力を発揮させる彼女がミーボに施してしまった狂気的な改造とは!?そして光の騎士たちはこの悪夢を消し去れるか!?

目次

遅すぎたドクターストップ ―― 1
仮想敵訓練：工場 ―― 17
強襲する不安要素 ―― 26
スポットを浴びた悪夢 ―― 34
事の外 ―― 47
占いの結果 ―― 63
方針確認 ―― 82
犯人はメイリイ ―― 92
仕込みを入れる ―― 99
抜き放たれた鞭 ―― 111
ちぐはぐなボディ ―― 125

遅すぎたドクターストップ

ここは遥かな大地　テラ
天才発明家がいると思われた
ロドスの一角が
理不尽にも吹き飛んだ。

一つの部屋の爆発が爆発する。
爆発は他の爆発を呼び寄せ、その研究室とそこで作られたすべてを呑み込む。
爆発の力か、ほぼ同時に巻き起こされた一企業都市ロドスにおける爆発。
これによりこの移動都市はしばらく停泊することとなる。

この事件が引き起こすことになる闇を宿した凶行を見出せるのか？
そして、大事なものを全て守ることができるのか？

―あれから一か月後。

滑らかな黒い壁に水色と黄色が平行線をなぞっていく廊下。
少し前にロドスの天才吸血鬼エンジニアが修理した照明は、残念ながら再び明滅していた。
幸いというか、ライトブルーに塗られた自販機の明かりが幾分か暗さをマシにしてくれてはいた。
そんな不規則に薄暗さが覆っている空間を通過しようとする人物。
ピンク色の髪に小柄な体。
黒いフードから微かに覗くザラックの丸い耳。
肩には男物の貸してもらったジャケット。
カジミエーシュの騎士、グラベル。
ドクターから貸してもらったそれを羽織って彼女は弾んだ足取りで前へ進む。
暗がりから出てきたグラベルはあるものを取り出した。
それは先ほどもらったキーホルダー。
青い汽車を象ったキャラクターが付いていて、いかにも子供が喜びそうな可愛らしいものだった。
ちょっと先ほど起こったことを思い出して摘まみ上げたストラップに視線がいく。

いつの間にかゆっくりと揺れるストラップ。
その陰から覗く端正な顔は、とてもやさしい微笑みに満ちていた。
「あいたっ！」
「あ、ごめんなさい」
唐突に出てきた作業着のエンジニアにぶつかってしまう。
数歩歩いたところで大事なものを落としたことに気付いたようだ。
すぐに拾い上げてほこりを払うと、足早に去っていった。

残された人影はしばらく佇んでいた。しばらくぼそぼそとした声でつぶやいたかと思うと、何かに気が付いたように顔を挙げた。
「これはいいインスピレーションだね」
よーし！いますぐやろう！　と薄いクマの目で笑いながら自分の研究ラボへ戻っていった。
「ラボ・ルトラ」へと。

ロドスの中でも随一の作戦指揮能力を持ち、トップの一人でもある指揮官。
普段ドクターと呼ばれる人物は深刻そうなオーラを醸し出して座っていた。
いつも黒づくめのフードで顔を隠しているが、対面した大多数の人がそう感じられただろう。
さて、そんな彼に対して気まずそうな面持ちのブレミシャインが来客用の椅子に座っていた。
密度の高い沈黙で満たされたこの部屋には声を出すだけの空気もなく。
普段とは打って変わった様子に、一応ドクターの方は向いているがよくよく見れば目を合わせないようにしている。
「どうぞ」
「あ…」
騎士の声とコーヒーの香りが堅固な沈黙に間を空ける。
こんな空間でも手際よくお茶を入れられる。
さすがはドクターの自称専属秘書…。
さざ波を立てるマグカップに目を落とすとやおら黒いバイザーが上がる。
「…ブレミシャイン」
「！は、はいっ」

思わず声が大きくなった。
（一体何の話かな？まさかウィスラッシュおばさんが関わってるのかしら…。）
身構えて次の言葉を持つものの、またドクターは逡巡してしまっているようだ。
もしかして、ものすごく重要な任務とかかしら？
今のドクターは口数が少ない上、どこかためらいがちな様子。
いつもの彼らしからぬ雰囲気に感化されたのか、力になってあげたい思いがこみ上げる。
高い頻度でサボりに来るのを匿ってくれるのもあるが。
（とにかく今はこの状況を変えなくちゃ）
カップの中身を半分飲み込む。
まだ熱かったけど私だって耀騎士の妹なんだ。
こんなところで弱みは見せないわ。
ううん、むしろドクターの為に身を乗り出すべきは私の方なのよ。
しっかりしなきゃ。
「ドクター？困っているなら話して！私を呼んだのってドクターがロドスのみんなのためにやりたいことがあるってことなんでしょう？」

「あ、ああ…」
さらに前向きに身を乗り出す。美しい耳がピンと立つ。自然と部屋へ光が満ちる。
「だったら大丈夫よ！私、耀騎士ニアールの妹なんだから、ね？どんなことだって半歩も引かずやり遂げてみせるわ！」
そう言い切ったブレミシャインの表情は凛としていた。
普段はひだまりのようにふんわりと包み込む様な可愛らしい少女だが、今の彼女は困っている者へ救いの手を差し伸べる騎士そのものだった。
「…」
「…ドクター？」
「そうだな、すまないブレミシャイン。そこまで言ってくれて嬉しく思うよ」
しばらく考えた風な間をおいてドクターはブレミシャインへ頼むことにしたようだ。
だが何故かドクターが申し訳なさそうな顔をして…いや顔ではなく雰囲気がそのように感じられた。
窓から差す光が丁度かげったせいなのか、それとも先ほどから一連のやり取りを見て俯きがちに体を震わせている秘書のせいなのか。
「たのむ！メイヤーの暴走を止めてくれ！」
机に伏すドクターの頭。

机の上で彼は真面目なトーンで土下座をする。
もしこれが漫画ならドンッ‼という効果音が出ているかもしれない。

全力の、気迫の、土下座だ。

…しばらく彼は何も言わなかった。
また騎士も何も言わなかった。
だが秘書は更に身体を震わせるともう耐えきれないと言わんばかりに笑い出した。
突然あっけらかんと笑い出した秘書のグラベルに、
真意のつかめない頼み事をしたドクター。
ブレミシャインの左右の耳はそれぞれの方へ向かっている。
眉根も末広がり、訳が分からないといった風に、
「へっ？」
なんとも可愛らしい、気の抜けた声を漏らすことだけが彼女にできることだった。
フクロウを象った鳩時計が正午を告げる。まだ昼休みは始まったばかりだ。

1時間前

ロドス　仮想訓練室

「仮想敵演習ですか？」

唐突に知らされた教官からの決定に行動予備隊Ａ１隊長である私、フェンは少し驚いていた。

「ええー？またなのぉ？」

「…やっぱサボった方がよかったかな」

「カタパルトお姉さん、帰っちゃうの？」

「ううん違うよ、ちょっと冗談言ってみただけ」

他の面々も驚きの声を漏らしている。

多分普段よりも多めの訓練人数、早めに切りあがった基礎体力訓練から全員がなんとなく察していた。

珍しく参加したカタパルトはなんとなく嫌そうな顔つきだったし、メランサもどこか緊張した面立ちで訓練に臨んでいたし、ビーグルはこっそりだが私に訓練予定の確認をしてきた。

仮想敵演習は週一回あるかないか位のペースで回される。

今週は週二ペースの気でいたから安心させるつもりで大丈夫と返した。

だが実際の所そんな気はしていた。いや、想像したくなかったのだろうか。

私ですら今ドーベルマン教官の決定を聞いて心が揺らいでいるのに、ビーグルとくると…。

「うう…やっぱり…わたし、みんなの足を引っ張らないかな…」

相当こたえているのが横目でも分かる。

先ほど安心させたのがかえって裏目に出てしまった。

ビーグルにはあとでお菓子を買っておかないと。

彼女には本当に申し訳ないことをしたな…。

「気をつけ！」

教官からの指示に全員が姿勢を整える。

少し静かになったところで一瞬訓練場外に目を巡らせたドーベルマン教官から指示が出された。

「今回も引き続き仮想敵訓練を行う。ただいつものようなホログラムではない。今回は対ロボット戦に主軸を置いたものになる。気を抜かず対応するんだ」

その言葉を聞いて少し緊張がほどけた。

ここのホログラムでは色々な相手が出現する。

アシッドムシの大群や聳え立つウルサス帝国軍先鋒が出てくるのはまだいい。

だがこの間はドローンを駆使する歴戦の戦士を二人同時に相手にした。
攻撃用ドローンを二機吐き出させるまで粘ったあの時の自分は誇っていいと思う。
かと思えば昨日は異形な怪物が相手だった。
円い口いっぱいにギザギザの牙を湛え、おぞましい姿と奇声とスピードで迫りくる怪物。
精神攻撃と医療マシーンとの板挟みの中で戦っていた時は永遠に続くとも感じられるほどだった。
本当にこんな怪物と戦う機会があるのだろうかと思いながらも、なんとか耐えきったが。
珍しいことにその後クルースからキャンディをもらった。
しかも私の好きな濃密ハニーキャンディ。
「これフェンちゃんにあげるね」
嫌いなものをわざわざ買ってきたのか譲ってきたのかはわからないが、彼女に心配される程私は疲れを見せてしまったのだろうか。
あの時はもっと厳しい訓練を耐えられるような隊長になろうと意気込めたっけ。
教官が咳払いをする。気がそれていたことに気付いてすぐに気を引き締める。
しっかりしなきゃ。

私はこの隊を導いていかないと。
でも、本当にロボットでよかったとは思う。
ホログラムで出てくるのはなにも敵と限ったことではないから。

「またこの演習にもう一人オペレーターが参加する。妨害役をつとめてくれるそうだ。各員、一層奮励して欲しい」

では待機、とそのオペレーターを呼びに離れていった。
いなくなったところでまたみんなが会話を交わす。
このタイミングで彼女を落ち着かせなければ。
その時私よりも声をかける人がいた。
同じ重装のカーディだ。
「ビーグルちゃん！凄い緊張してるね！」
「うわっ！カーディちゃん!?」
「ねーねーあたしすっごく調子いいんだ！なんでだと思う？」
「え？んーと？」

急な質問に戸惑うビーグル。
いつでも割って入れるように用意しながら話を聞く。
「今日訓練の前に水を買ってきたの！それも自販機で！すごいでしょ！普段だったら購買で買うんだよ！後でスチュワードくんに自慢するんだー！」
すごいご機嫌なことを矢継ぎ早に話すカーディ。
とても嬉しいことだったのだろう。
後ろでその本人が聞いているのに気づかない程に。
「す、すごいですね……！よかったです……！」
「ありがとう！……だからビーグルちゃんの分まであたし頑張るんだ！もしミスしちゃったとしてもあたしがカバーしてあげる！だから、大丈夫！二人で一緒に乗り切ろうね！」
妙なテンションで話しかけるので心配していたが、どうやらカーディなりの励ましだったようだ。
私がしようとしていたことを彼女が代わりにやってしまった。
あの活発さはロドスの誰にも負けないだろう。
お陰で私も上手く緊張が解けた。
「二人でじゃなくみんなでね」

「フェンちゃん！」「フェン隊長！」

二人とも向き直る。

「ありがとうカーディ。お陰でもっと頑張れそうだよ。みんな辛いけれども今まで私たちは耐えてこれたんだ。この訓練を乗り切れば私たちはもっと強くなれるよ」

だからビーグル、と彼女の肩に手を置く。

「一緒に乗り越えよう。ここまでこれたのもビーグルがいてくれたからなんだ。私たちに追いついていこうと頑張ってくれたから私も頑張れたんだ。みんなと一緒に約束を果たしたいから」

約束。

いつかロドスから離れ、この大地の宿業も鎮めた後の約束。

私たちを過去と今を繋ぎとめ、未来へ向かわせる約束。

肩に置いた私の手に勇気のぬくもりが重なる。

眼鏡の奥には決意の光が差していた。

「隊長…わたし、まだまだ頑張ります！」

ビーグルが立ち直った。

その姿を見て私も勇気をもらった。

こうした時の彼女はとても心強い。

普段から控えめがちな性格だがいざというときには頼りになる。
格好良くて私は好きだ。
「え～、今のうちにみんなでサボっちゃおうよぉ」
「クルース！」
それに比べてクルースときたら！
ここまで来ておきながら逃げようとするのには呆れて何も言えない。
珍しくラヴァだって来たというのに！あの時、嫌そうな顔つきをしたラヴァと後ろに付いてきた満面のハイビスからラヴァがやって来た理由がなんとなく察せられた
だが今回は何も言わないでおく。

と、ドーベルマン教官が戻ってきた。後ろに一人ついてきている。
オレンジ色が印象的な人影は段々と近づいてくる。
と、クルースが「メイヤーさん？」と呟いた。
アドナキエルは「誰？」と漏らしている。
改めてみるとより姿がさっきよりもハッキリしてきた。
ライン生命の制服に、作業用アームの目立つアーツユニット。

ロボット工学のエンジニアであるメイヤーさんだ。
しかし正体が分かったら今度は理由が分からなかった。
メイヤーさんは基地の中にいて、戦闘に参加するようなタイプではないはずじゃあ？
あれ、直前の三回目、相手がロボット、メイヤーさん…。
「めんどくさいことしてくれるねぇ」
クルースが毒づく。微かに目が開いたような気がした。

教官が元の位置に着くころには私たちは再び姿勢を正していた。
メイヤーを傍に控えながら教官は紹介を始める。
彼女は特殊作戦に参加するオペレーターで、カワウソ型自律歩行ロボット「ミーボ」を駆使して戦う。
今回新型ミーボの実験データを取るために私たちの仮想敵訓練に参加するとのことだ。
その時はそう伝えられるだけだったが、後々考えてみれば予兆があったと思う。

カーディの幸運。
すれ違った金色の騎士。

ポプカルの新しいストラップのキャラクター。

全てが警告だとあの時の私は気付けたのだろうか？

とにかく一つだけ言えるのは、「新型ミーボ」が恐ろしい脅威になったということだった。

仮想敵訓練：工場

ロドス　仮想敵訓練中の訓練室
ロボットの噴出する催涙液。
？がされる装甲版。
飛び交うボウガンの矢。

現在、行動予備隊は適性区域となる工場内へと進攻していた。目標は敵の一区画を占領、味方の本隊が到着するまで維持すること。そのためフェンたちは予備隊を二つに分け、侵入することになった。チームαは陽動を兼ね正面から制圧するルート、もう一方のチームβは内部へ浸透、背後から敵勢力を削り正面突破を助けるルートで攻めていく。

彼女が率いるのはαチーム。正面突破組だ。

予想通りロボットの大群が列をなして群がってくる。その中を彼女たちは攻撃側でありながら防御の陣形で立ち向かう。

「隊長！敵がさらに来ます！」

「ラヴァ！ビーグルにアーツで支援！」

「ああ。任せろ。」
　ロボットの群れにアーツが爆ぜる。爆発に装甲が砕け、内部の機構が燃える。まともに動けなくなるロボットをビーグルが対処していく。
「ドローン3時方向！クルース！」
「今やっているよぉ」
　指示より早くクルースの矢が飛ぶ。正確に放たれた矢は過たずドローンの小さな胴体に当たる。中古品のジャンクは相次いで墜落し、新たな残骸の一部となった。
「アンセル通信はまだ!?」
「あと少しで所定の位置だそうです！それまで持ちこたえてください！」
「重装を下げて！側面方向に火力を集中！スポット、ポプカル！」
「あと少しで仕込みが終わる。隊長、少し余りそうだが全部仕掛けるか。」
「一応残して！地雷敷設が終わり次第二人とも合流！」
　普段よりもフェンは慎重になっているのを自覚する。何しろこの演習はイレギュラーの存在が一番の問題なのだ。今までの経験から上手くいっている時ほど、不意打ちを食らうのは分かっている。しかも常にこちらの嫌なところを突いてくるのがより対処を難しくさせる。
　昨日は戦線が例の怪物で崩壊しかけていた時、ダメ押しにシーボーンが現れた。だが

それでもまだマシな方で、事前情報にない呼吸を阻害するガスが蔓延していたり、護衛対象が想定外のルートを通ったり、茂みからカランドの社長が飛び出してくるなどどれも厳しいものばかりである。

今のところ悪い状況ではない、それどころか余裕を持って対処できている。それでも警戒を怠るわけにはいかない。フェンはあの闖入者からただならないナニカを感じていたからだ。

「こちらチームβのメランサです。予定地点に到着しました。」

「こちらチームα隊長フェン、了解。準備が整ったら支援をお願いします!」

オーバー、と通信を切ると大量のロボットが倉庫のシャッターや区画の隔離壁を開けて入ってくる。それらが上がりきったところで、攻撃ドローンの黒い大群が続く。逆に予備隊のやって来た隔離壁は閉ざされる。まさに袋のネズミである。

相手側は布陣がすでに整ったようだ。ボロばかりとはいえ頭数は圧倒的。長い蒼髪のクランタたちを筆頭とする色彩豊かな勢力は緑青と黒鉄一色に踏みつぶされそうな恰好に見えた。

とうとうロボットが突撃を開始、その最前線が防御陣地に突っ込み始めた時だ。側面から突然爆発音が響き渡る。先ほど仕掛けたミスターランブルが作動したのだ。

続いて大群の中から爆発。装輪や無限軌道が外れ中には片側がすっかり外れ、逆走しだすものまであった。後続は突然障害物となったものたちを避けるか衝突するかの二択に迫られ、多くの損害を被った。

一回り大きな影が混乱を始めた群れの中から現れる。追加の装甲版と重武装を施した強化版といったところか。

その強化ロボ「スタグビートル」はすでに撃破された残骸を乗り越え盾持ちへ襲い掛かる。

と、ここでスポットがアシストで煙幕を張る。

攻撃目標を上手く捉えられなかった兵器は攻撃を中断。

背後から不意をついて二本のハルバード。

切り離される二本の武装の杭と許多の装甲。

ズタズタの背後をかばうようにすぐに振り向き至近距離に放った跳躍地雷。

しかしすぐに現れる一枚の盾。

「へへー効かないよー」

やってきたのはカーディ。地雷の高スピードで拡散したインク弾を防ぎきった。次の攻撃を行おうとしたロボットだが、ボロボロの背面がアーツ弾の強撃に撃ち抜かれ遂に機能を停止した。

「カーディ！合図を待たずに突っ込まないでくれ！」
「ごめんね！でも二人とも守れたから別にいいでしょ？ね、スチュワードくん！」
「一体がフェン隊長の方へ抜けていきます！」
プリュムが声を上げる。その声に横を向けば煙幕の晴れ間から迂回する強化型の姿が見えた。狙いはリーダーのクランタ。
両者の距離が縮まっていく。距離は２０ｍもないだろうか。フェンは堅実な戦いを得意とするが、先ほどの地雷と双つの杭を槍一本で防げる訳ではない。ますます接近していく敵。フェンは槍を構えて相手の接近を待ち構えた。

「かかってこい…！」
ロボットが目標を変えると考えていなかったことで今私は窮地にいる。これも油断なのだろう。切り抜けられる自信はない。目は乾いて、指先が痺れてくる。何度やってもこの感覚は馴れない。だがいつもの通りやるしかないんだ。
するとドクターが指揮をする作戦の様々が脳裏で切り抜かれる。背中を押してくれる感覚と共に、落ち着きと勇気が満ちていくのを感じた。
目を閉じて手の力を抜く。そして開いた目は真っすぐに敵を見据えていた。
（耐えろ、私！）

もう幾分の猶予もなく接敵する。だが敵の足は突然急激に鈍る。千々れた煙幕の陰から飛んできた黒い楔に足止めされたのだ。すぐ迎撃のため足を止め、相手を捉える。そのカメラのレンズには黒い傘を向け毅然として立つオーキッドの姿が映っていた。

（今だ！）

すぐに私は駆け出し始めた。クランタの脚力を生かして疾走する。

気を取られている内に私が仕留める！

目指すは一番薄く反撃できないであろう上面。ここに辿り着きさえすれば一方的に攻撃できる。だが実際の敵は想像の敵とは違った。

（…っ!?）

すぐにこちらへ振り向く機体。無機質に赤く光るカメラが飛び込む身体を見つめる。頭の位置を調節し、杭を打ち込む姿勢に入った。残念ながらワンテンポ早い段階でこちらに標的を決めた敵にとって、飛び掛かる少女は格好の獲物となった。

杭を納める穴の奥がしっかり見える。

全てが鮮明に美しく映える。

景色がゆっくり流れる。

身体は止まらない。

止められない。
衝撃が襲う。

……。

……攻撃がない。
相手が撃ってこない。
どういうことなのだろうか？
私はなぜ攻撃を受けていない？
先ほどの来た衝撃は一体何なのか？
一体誰が私の窮地を救ってくれたのだろうか？
数瞬の後に天蓋に剣を突き刺したチームβ隊長、メランサの姿が映ったことで状況を理解した。すぐさま飛び乗るとメランサの開けた突破口へ精密な突きを入れる。奥の配線を切り裂いたのを槍越しの両手に感じると、すぐにねじり引き抜いた。身長の2倍はあろうと思われる巨体が沈黙し、底部を地面に伏したまま動かなくなった。

完全に動かなくなったところを確認したあと、周囲を見渡す。
正面大通り。ほぼ掃討完了。やや残党がいるが問題はない。
側面通路。最後尾の地雷が残っているので、恐らくまだ着いていないか殲滅済み。
背後は隔離壁が塞いでいる。
ひとまず安全が確保できたため、少しだけ息を吐く。
「ありがとうメランサ。怪我はない？」
「少し腕が痺れてますが、大丈夫です」
「一応後でアンセルに診てもらおうか」
「はい…あ、いえハイビスさんに診てもらうことにします」
「ハイビスに？」
「はい、あまりに手持無沙汰でいたので…」
「うん、それは大変だね。じゃあメランサはここで待っていて」
「あのフェンさん私も…あっ。」
　と言い終わらないうちにすでに側面へ向かうフェン。綺麗な青い後ろ髪がたなびき、遠ざかっていく。正面ではすでに裏方の仕事を終えたミッドナイト、カタパルト、先ほど話に出たハイビスが出てきている。アドナキエルは先ほど倉庫の細道へ駆けていく所を見たので恐らくフェンの援護に向かうものと思われた。

ハイビスはと言うと辺りへすぐ救護できるような動きをしているが、立ち止まっている時の方が長く今のところ活躍できてないように見える。所在なさげなアーツロッドに時折目をやっては戦いの様子を窺う。その表情は何ともやり切れないことを表しているようにメランサには思えた。

周りが良く観察でき心優しいフェリーンが歩みだす。瓦礫が転がる地帯へ入ると駆け足で行くようにする。ここはまだ、安全ではないから。

「ハイビスさん」

「はいっ!?メランサさん?」

「少し手を痛めたようです。後で診てもらえませんか?」

「…!ええまかせてください!この私がしっかり治しますから!」

やはり数を集めても所詮はその程度。幾分もしないうちにオイルでくすんだ黒灰の道路を一人も欠けることなかった色たちが踏み越えていく。

目的地への先を照らす照明が細かく明滅を繰り返していたが、やがて切れた。

強襲する不安要素

とうとう予備隊は目的地点を確保した。あとは占領までの１０分間敵の攻撃を退ければ訓練は終わる。フェンたち予備隊はしっかりと準備を整え、敵に備える。

彼女はここでメイヤーが来ると考えていた。ミーボは小柄で素早い動きで翻弄し、自爆で多くの敵を屠る戦い方をとる。そのため集団ではなく二、三人で一組を要所に配置。また遠距離攻撃できる者を必ず一人一組入れ、爆破に巻き込まれないように戦ってもらう。これでミーボの動きは封じられると考えている。

唯一の懸念は占領地点が二階建て倉庫に限定されている事だった。散乱した機材で視界が悪く、また侵入経路も多数ある。小柄なカワウソなら通気口からでも侵入できるため、理論上は倉庫全体が入口になりうる。入ってくるところを速攻で叩く布陣で挑むも、万が一内部に入られた時にはこちらが不利になる。

つまり相変わらず厳しい状況だった。

ザザっと音がして無線が繋がる。慣れた手つきで交信を始めるフェン。

「こちらフェン。敵は見えるか？」

「こちらアドナキエルです。視界良好、敵は見えません。どうぞ」
「こちらフェン了解した。引き続き警戒せよ。どうぞ」
「どうしたの隊長？　ずいぶん固いようだけど……。ひょっとしてまだ何か引っかかっているのかな？　例えば、残り五分を切ったのに動きのない敵の事とか？」
「……そうだね」
薄汚れたデスクに両手を置き、監視モニターを睨む。カメラを切り替えながら慎重に攻撃パターンを考え込んでいく。もしやってくるならもう来てもおかしくないはずなのに。それとも何か見落としがあるのか？　先ほどから何となく嫌な感じも続いている。それが体を強張らせているらしかった。

突然電気が消え、部屋全体が薄暗闇に包まれる。瞬発的に天井を仰いだ。

「っ！　来るぞ！　各員持ち場を離れるな！」
「隊長来ました！」
「メランサ気を付け「え、これ……ひゅいっ！　いっ、やっ……！」」
「メランサ?!　どうしたのメランサ！」
突然の叫び声を最後にメランサが応答不能に。まだ繋がっているインカムからはカ

シュカシュと軽快な駆動音が響いていた。
　そして被害はこれだけに止まらない。

「動きが早すぎる！　ダメ！　持ちこたえられない！」
「ミス・バニラ、俺がカバーにっ!?　ガッ！」
「バニラさん！　ミッドナイトさん！　まずい！」
「待ちなさいスチュワード君！　ここは下がるのよ！　行っちゃダメー」
　全てをかき消す爆発音。オーキッド小隊があっという間に壊滅する。

「突進してくる！　止めてっ！　ビーグル！」
「たぁ！　ありがとプリュムちゃん……な、な、何ですかこれ！」
「二人とも奥へ下がって！　あたしが足止めするよ！」
「頼みますカタパルトさん！　う、裏からも！」
「ひいいっ！　ごめんなさい！　ごめんなさい!!」
　隊長を失ったメランサ小隊は撤退を余儀なくされる。

「アンセル君が爆発に巻き込まれちゃったよ！」

「カーディ、あたしと一緒だ。助けるぞ。あんたたちは正面の奴を上手く追い込め」
「分かった。……よしポプカルそこだ」
「うん！　任せて！」
突然の攻撃にラヴァのチームは対応に追われている。ある程度善戦しているものの厳しい様子だ。

暗がりの中でフェンはひたすら呼びかけることとインカムを耳へ押しつけることしかできなかった。セオリーが通じない事態に遭うのは度々経験済みであるものの、一瞬で対策全てがひっくり返される経験は果たして何度あったのだろうか？
対応策の練り直しを模索しようとするとどこまで作戦が崩壊したかを調べる必要がでる。そのために押し当ててでも情報を得たいが今からでも立て直しの策を立てたい。だがそのためには調査の必要が、と延々と続く。さながら循環小数の最後の数を上手いトリックをつかって求めようと四苦八苦する数学者のような取り組みを続けるしかなかった。
「皆！　聞こえる!?」はっきりと意志を感じさせる声。アドナキエルだ。
「聞こえる？　アドナキエル！　どれ位無事か分かる？」
「今オレはラヴァ、カーディ、アンセルと合流してる！　アンセルがダウン中、ラヴァも

攻撃を受けたみたいで戦闘が厳しいみたい！」
「他の隊は？」
「先ほど通信を図っていたプリュムとの連絡が途絶えた。カタパルトともはぐれている状況だと恐らく……」
「分かった。アドナキエルはその場にいる人たちを連れて私のいる管理室まで来て。上階の階段付近で多分ハイビスとクルースが待ってるはずだからとにかくそこを目指して！」
「オッケー！　それじゃあそこまで向かうよ。じゃあまた！」

通信を終了したアドナキエルがアンセルを背負う。爆発のダメージが大きいのか時折うなされているようだ。４人で移動を始めた時、ラヴァから追加で状況を聞く。
なるべく追加情報をとって知らせておくのもある。だが隊長にだって少し時間を置いた方がいいだろう。ただ音声に異常なほどの恐怖が混ざっていたことが特に気になっていた。まずは先ほど聞きそびれたスポットとポプカルのこと。
「あいつらはB出入口から侵入してきた敵を叩こうとしていた。少し前にポプカルを追いかけるといってスポットからの連絡が切れた。それっきり」
「メイヤーさんにやられたのかな」

「いや仕留めた。そう言えばあいつはロボットの姿を見た途端泣いて走り出したといっていたな」
「私も聞いたよ！　なんて言ったか分からなかったけど…。　あ！　そうだあのおもちゃにそっくりだった！」
「あのおもちゃ？」
　何かキーワードとなるような言葉を聞き出す。次に敵について。
「奴らは恐ろしい邪念を宿していた」ラヴァが口を開く。
「見てくれは一瞬おもちゃのような奴ら。だがあたしはあの顔の裏側を見逃さなかった。いや、あれ程の狂った霊力は占いを使わなくても分かる」
「ふーん？　それ、どういう意味なのかな？」
「まだ僕もハッキリわからないんだけど」
「とにかくすっごいひどかったよ！　うーんどれくらいかっていうとねー……とにかくすごかった！」
「オマエも見ればすぐ分かる。あれはこの大地に存在してはならないものだ」
「酷いなー！　あたしが精魂込めて作ったミーボに何てこと言うのさ！」
「そうだよラヴァ。ちゃんとミーボに謝って……って！」
　即座に三人はイレギュラーに向かい合う。それはあの教官の隣にいたオペレーター、

メイヤーに間違いなかった。クマの濃い目をらんらんとさせて、彼女が一歩近寄る。
「大丈夫だよぉ二人とも」
また一歩にじり寄る。彼らは見えない壁に押されるように一歩下がった。
喜ばしくないことにアンセルがここで目を覚ました。「気絶」という知らない権利を持つはずの彼は、ここでその権利を放棄してしまったのである。気が付いた彼は状況を把握しようとしてメイヤーの足元にいるロボットに目が行く。向こうもこちらと目を合わせると獲物と認識したように赤く輝かせた。焦点が合わさったアンセルはアレと二度目の遭遇を果たしたことを認識して急激に血の気が引いていく。アドナキエルの肩を抉らんばかりに強く握りしめ、潤んだ瞳、しゃくり上げた呼吸でアレを拒絶する。
「一蓮托生」という言葉がある。チームの団結力がとても強いことを表すこの故事成語は、如何なる組織でも理想的ともいえる状態を意味する。お互いに信じ合い、助け合う。他人をまるで自分の身のように大切にできるという事であれば、この予備隊は一蓮托生と言える素晴らしいチームであると誰が否定できようか。教官のしごきと厳しい戦場で磨かれてきたこの絆を誰が断ち切れようか。ちなみにこの状況のような意味も持っている。
そう、「連帯責任」とか。

「じっくり見ればすっごい可愛いんだからぁ」

誰ともわからぬ悲鳴が倉庫内にこだました。

スポットを浴びた悪夢

もうこの地点を保持できるだけの力は無かった。
先ほどの通信からアドナキエルが再びかけてくることもなかった。
その代わりに金切り声が下の階層から響いてきたため、いよいよ作戦失敗が現実のものとなりつつある。
その後ぽつぽつとメンバーからの通信が出てきたが、聞くほどに部隊壊滅や連絡途絶の情報だけが募ってくる。
それがわずか４人。
アドナキエル、ハイビス、クルースを含めても動けるのが７人しかいない。
フェンはクルースとハイビスと連絡し、合流することにした。
すでに目の馴れた薄暗い廊下を駆け抜けていく。
薄明りの差す窓辺の廊下へ出る。
あと少しで管理区画を抜け合流地点へたどり着くところ、すぐに足を止めた。
薄明りが斜に切り込んでオレンジの戦闘服を照らす。
数歩先に佇む人影が一歩足を進める。

薄ぼけていた顔の輪郭がハッキリと現れる。
この事態を引き起こした張本人その人。
「やあ！　フェン、だっけ？　君すごいね！　予備隊のみんなが何であれほど強いのか分かった気がするよ！」
「メイヤーさん……」
「でもね私ちょっとショックなんだ。だってあたしが手をかけた「スタグビートル」は君に壊されちゃうし、ニューモデルのミーボは何故か怖がられちゃうし」
「……？あのちょっといいですか、メイヤーさん？」
「うん？もっと装甲を増やした方がいい？でもあの装甲だと超強化ポリイミドなんかよりもいいものあるよねえ、フェンさん？」
「え…、あ、あの、その…」
「もちろんキノコだよね！」
「はい？」
「それからミーボの実践データと、素晴らしさの布教と。やっぱり、同時に進めるのやめた方がいいかな？」
最早フェンには考えることも出来なかった。フェンには理解して当然だとでも思っているのか。会話の段階を相手は平気で飛ばしてしまう。

「あ、普段よりも私お喋りだね！　アハハ！　やっぱ7徹はやめた方が良かったかな？　でもあんな素晴らしい改造思いついたら誰だってこうなるでしょ！」
「あの……」
「何？何か聞きたい事でもある？」
クックックッ……といかにもな作り笑いと変に身の屈んだ体勢を見て立ちはだかるこの敵役。明らかに気がふれているレベルで重症である。ミーボもライン生命の同僚たちも何故こうなるまで放っておいてしまったのか。暗い通路の中であってもその目は満月のように光り輝いているようだった。そんなテンションにのれるはずもなく、硬直した頭を無理やり回転させることで精いっぱいだった。
「その…大丈夫ですか？」
「大丈夫？」
先ほどの笑い上戸のような雰囲気を一瞬で消し、真顔のままフェンの顔をじっと見つめる。急激な変化にフェンは少し寒気を覚えた。何か拙いことでも言ったのか？だがどういう反応なのかよくわからない。しばらくお互い黙り続けていたが、
「そう言えば、ドクターにも言われたなぁ。実戦で出せればイメージアップ間違いないって。それだから教官にもお願いして、申請したり、もう大変だったよ。でも自信作の新型ミーボのお披露目会の為なら、どこまでもやっていけるからね！」

「申請？お披露目会？メイヤーさん、まさかそれだけのために？」
「うるさいな！黙っててよ！」
「ひぃっ！」
　くどくどとしつこく話しかけると思いきや、急変して怒鳴りつけるメイヤー。知っている仲のフェンでもすぐに逃げ出したくなっていた。
「それでね…そう、ドクターにも言われたなぁ。実戦で出せればイメージアップ間違いないって。それだから教官にもお願いして、申請したり、もう大変だったよ。でも自信作の新型ミーボのお披露目会の為なら、どこまでもやっていけるからね！」
（また同じことを…一度撤退しよう……！）
　フェンは次のタイミングで逃げることを決めた。
「そうですよね！」
「そうそう！ドクターにも言われたなぁ。実戦で出せれば…」
（今だッ！）
　何にせよすぐこの状況から脱出しなくては！
　すぐさま踵を返し全速力で脱出口へ駆けこもうとする。
　だが二歩目を踏み出した足めがけて小柄な何かが体当たりした。
　上手く踏み出せない体は前のめりに倒れる。

その腰元へ何かが着地。ドスッという音と共に肺の空気が押し出される。
起き上がる勢いを削がれうつ伏せになるフェン。
その直後に光が降り注いでくる。電源が復旧したようだ。後ろからは呻き声が聞こえる。
目が慣れ次第に顔だけを動かし、背中に乗っかる物体を確認した。

カワウソの形をした骨格。
空五倍子色の手足に青白の胴。
両肩に誇る黄色の「1」。
頭に頂いた小さい煙突。
そして彫りの深い頬の特徴的な微笑のある円い顔。

瞬間的にフェンは心の底からそれに畏怖した。
早く立たなくては殺される！
それだけが心と体を支配していた。　そして顔を前へ戻したとき、先ほどの顔が目の前にあった。
それは顔を回転させる。

ウイーンという駆動音と共に微笑みが一回転。
しっかり合わせた目を朱殷色に光らせ汽笛を鳴らす。
急激に目の前が遠ざかっていく。
辺りが光を失っていく。生命が抜けていくのを感じる。
そしてフェンは意識を失った。

◇

「ッ……はっ！」
意識が覚醒する。
目覚めると白い天井が見えた。
ここは医療室の一つだ。
私は今どこにいるのか確認するためにゆっくりと辺りを見回す。
「っ！　痛い……」
頭に鈍い痛みが広がる。

そのせいでまだふわふわした感覚でいる。
ただその他には特に問題はない。
「気が付いた～？　フェンちゃん」
「クルース……」
頭の上から声と見慣れたウサミミ。
心配していた隊員が無事でいてくれたことが安心感をもたらす。
「気絶したって聞いてね～、もお～フェンちゃんはドジなんだからぁ」
「あはは、ごめんよクルース……そういえば他のみんなは？」
「ちょっと待っててねぇ、今先生を呼んでくるからぁ」
「先生？　ちょっと待ってクルース！」
そう言うとクルースは出て行ってしまう。
その立ち振る舞いになぜか違和感を感じていた。
そういえばさっきもこんな風なすれ違いがあった気がする。
身体を動かそうとするフェン。
だが手足が動かない。
不可思議な力で押さえつけられているかのように手足の自由が利かない。
今は頭以外の自由がない状態にあった。

（どうして……動かないの！）
せめて動ける頭で自分が今どんな状態にあるのかを確認する。
突然部屋の明かりが消えた。
それと同時にドアが開く。不快な金属を引きずる音が響きわたった。
暗闇の中、足音が近づいてくる。
すぐそばまで近づいたところでフェンの顔めがけて強力な照明が落とされる。
光を手で遮ろうとしたが手は動かない。
目をつぶって耐えていたが急に光が遮られたことを感じる。
おずおずと目を開く。
先ほど話をしたクルースの顔が至近距離で顔を見つめているのだった。
息遣いが聞こえ、柑橘系のにおいがする。
まるでいたずらが成功した大人のような得意げな薄笑いを浮かべていた。
「ごめんねぇ。脅かすつもりはなかったんだよぉ。でも驚いたフェンちゃんの顔を見るのわたし、好きだよぉ」
「な、何言ってんの！　ふ、ふざけないで！」
「あれ？　赤くなっちゃった。いっつも怒ってばっかりなのに、どうしていつもはそんな顔見せないのかなぁ」

「やめてよクルース！」
「でもこの顔も最後だと思うと残念だよぉ」
「へ？　クルース……何を言って」
「あ～そうそう、先生を呼んできたよぉ」
　オレンジ色の髪が脇へ避けると、もう一つのオレンジ色が現れた。
「やあ！　また会ったね！」
　それは白いマスクを着け、緑色の使い捨てエプロンを首にかけたメイヤーだった。
　その手にはなんだか怪しい銃のような機械が握られている。
「キミたちがミーボを壊すから数が足りなくなっちゃったんだ！　だからね、布教と補充を一緒にできる方法を思いついたんだ！」

キミをミーボにしてあげる。

目の前の狂人は確かにそういった。
そして告げられたのは被験者よろしく寝かされている負傷者。
つまり言葉がそのまま正しければフェンはメイヤーにミーボにされるという最悪の未来がこれから現実となることを宣言したことになる。
「クルースッ！　早く！　逃げて！」
警告を飛ばして逃げるように言う予備隊隊長。
だが動かない。何故動かないのか？
その顔は闇に包まれてしまって見えない。
「聞こえないの！　私はいいから早く！」
なんとしても逃がさなくては。
その一途な意思が通じたのかゆっくりと顔を挙げた。
「い、いや……」
先ほどとは似ても似つかない白すぎる肌。

彫りの深い頬。
アルカイックスマイル。
しっかりと挙げた頭はその言葉に反応するかのように汽笛を鳴らした。
「そんなっ……これっ……トーマ……!?」
すると辺りに予備隊のみんながいることに気付く。ただみんな顔が隠れていてよく見えない。
一瞬無事なことに安堵したが、部屋の照明が全てを照らしだした一瞬で逆の感情に置き換わった。

全員の顔が明らかな作り物の微笑みを湛えて立っていた。

一斉に目だけが全てぎょろりと動き汽笛を鳴らす。
ピッピーとこだまする警笛はまるで新たな仲間が増えることを喜んでいるようだった。
それと同時に急に陽気な音楽が流れだす。

汽車をイメージするようなサウンドを背景に、全員目を赤く光らせた。

「……！　……!!」

全力で首を振るフェン。

何とかしてこの悪夢からの抵抗を必死で試みる。

だがマッドサイエンティストが奇妙な装置を目の前に突き付けられる時になっても、何の助けもなかった。

声にならない声で許しを請う。

だが果たして声がついていたところでこの実験は中止になるのだろうか？

「ちょっと苦しいけど」

目の前に装置の先端が突き付けられる。

が　ま　ん　し　て　ね　。

目の前が真っ白に染まった。

事の外

A．M11：39

昼休みもそろそろ終わりそうな頃、ドクター、グラベル、ブレミシャインの三人は医療部にいた。全員真剣にフォリニックからの報告を聞いている。

少し前に自身の恐怖体験を語り終えたドクターのもとに、フォリニックからの一報が入った。隠し切れない戸惑いを感じるフォリニックの声に、一瞬話中の人物がよぎる。なんとなく嫌な予感のあったドクターは、確認のためメイヤーが関わっていないかと聞いてみた。

その答えが今の状況である。

「以上で報告を終わります。……しかしメイヤー氏は一体どうやってこんな事を起こせたのでしょうか」

「……」

「申告して頂いた彼女の戦闘スタイルは、心理的なダメージを与えるものではないようです。ですが今回運ばれてきたオペレーターは半数が神経症にまつわる症状ばかりが見られます」

「……」
「ドーベルマン教官より聞いたところ新型ロボットを交えた戦闘訓練をしていたとのことですが……ちょっと聞いていますかドクター？」
「……」
「ねえドクター……？　大丈夫？」
「あ、ああ大丈夫だ」
　少し心配げなブレミシャインをよそに、フォリニックは先ほどの返答に納得したようにカルテへ目を戻す。
「……症状が軽い方から話を伺いましたが、皆『恐ろしい』ロボットを見たという点で共通していました」
「それは無理もないだろうな……」
「ドクター、何かご存じなのですか？」
「うん、実は今日メイヤーの様子を見に行こうと考えていたんだ」
「彼女たちもドクターに随行されるおつもりで？」
「ああ、だが一歩遅かった……」
「……ドクター？」
「……」

とまたも沈黙してしまった。きっと先ほど話していた例のあのロボがフラッシュバックしているのだろう。あの時の話しぶりはまるで思い出したくないと言わんばかりの様子だった。ブレミシャインは怖いものが苦手であるから、俯いて目を逸らし微かに震えるその姿に共感するものを感じていた。

一方のドクターはというと。

（これ私か？　私がやらかしたのか？）

あの時二人には話していなかった話の先、今悩みの種となっている続きを思い起こしていた。

青い電気ケトルがシューッと音を立てて、白い蒸気を小さく噴き出す。噴き出す蒸気は白と橙のＬＥＤに染まって鋭く煌めく。

その煙を背後に二人は話していた。一人は先ほど思いついた革命的発想についての思いを声高に語り聞かせている。戦場と日常の両方に別角度から切り込んだデザインだとか、柔軟なサスペンションと複雑な形状との矛盾における解決法だとか、いかにもメカニックエンジニアが辿ってきた試行錯誤を語る話ではよくありそうな問題である。こうした矛盾はよくよく起こることは飽きるほどに知っているドクターではあるし、それが解消できたことへの喜びというのも共感できることだ。

にしてもこの目の前にある「革命的発想」は一体何だろうか？

目の前にあるミーボは、それは確かに革新的な思考のもとに設計されていることが窺える。全体的に角ばっていたフォルムも流線形を持っている所が増え、また肢体のパーツ結合部分もよくよくミーボと触れ合っているドクターなら明らかに違った接合方法を採用していることも分かる。

だが、姿。主に姿形が余りにも異形すぎた。まず身体全体が基本青く、手足の向きに沿って赤いラインが走っている。

肩には赤く縁取りされた黄色の「1」。そんなどこかで見たような「1」が両方の肩に付いている。

しかも比較的がっしりした胴体に比べ、足の方は先端になるにつれ極端に細まっている。一応爪先や足の部分にはカバーとなる装甲が付いているが、如何せん立ったまま見ると隙間からガッツリ見えているので余計に目立ってしまっている。

極めつけはその円筒形の頭だ。その頭はあの有名な機関車のものに酷似している。なんなら煙突もご丁寧についている。彫の深い永久不変の笑みを見て、どの辺が日常との両立が出来ているのかとまず思った。

製作者は子供にも向き合えるようにデザインしたと言っているが、どう見ても大泣き確定演出でしかないデザインだ。というよりも理解できないというのが常人として正

解だと思う。

光るキノコを食べてしまったかのようだ。顔を向けると、向こうもこっちを見てきた。でしょ！というかのように微笑む。まるで訳が分からないというポーズをとると、メイヤーはサムズアップをしてみせる。何がどうしてこうなった。

シューッと立っていたポットの音が徐々に静まっていく。鈍く明るい部屋の中で二人っきりになった。

「な、なかなか個性的だね……いいと思うよ……多分……」

「でしょ！　ドクターもそう思うよね！　そーだ！　この可愛いミーボの面倒みてよ！」

「え？　今なんておっしゃいました？」

「だってよく世話してもらってるでしょ？　この子たちもこんな魅力的なんだし、みんなに見てもらいたいんだ！　あたしはまだ部屋から出るわけもいかないし、ドクターの執務室ならみんなが見てきてくれるでしょ？　ね？」

「いや、あのー、メイヤーさん？」

彼女の悪い癖がまた始まった。徹夜でハイテンションになってると突然ぶっ飛んだ会話や提案が出てくるのだ。

普段ならミーボが引き留めてくれると聞いているのだが、たまに制止を振り切って作

業に勤しむ。特に酷い時には平気で一週間は寝ずに研究するのだ。そんなときには深いクマと開いた瞳孔の光加減ですぐ分かる。

（確かに彼女の研究は大いに役立っている。私もかなり助かっている。熱意は素晴らしいのだがなぜ私を巻き込むんだ……）

「ドクター？　どうしたの？」

（ほら！　その急激に笑顔から真顔になるのをやめてくれ！　怖いんだよ！）

急激な温度差というのは人間にはあまりなじみが薄い。春から夏にかけて、秋から冬にかけての急激な差は体調不良のもととなる。全く追いつけないテンションの乱高下に精神は疲労しつつある。丁度良くケトルの音がふっつり切れてしまって余計静けさが目立っていた。

こういう時、人は思考を削られる。私も例外ではない。

（とはいっても……）

横目でもう一度「可愛い」ミーボを見る。

軽快なステップで踊っているソレは、私の視線に合わせて顔を瞬間的に向ける。踊りながらぶれなく正確に顔を見据え、そのまま喜ばしげに尻尾を振ってみせた。

私は思った。

キモい。そして怖い。

正直言って、このミーボを執務室に置きたくなかった。

もしも執務室に「可愛い」ミーボを連れてきたらどうなるか？

想像してみよう。アーミヤが書類の束を持ってきたとする。

「ドクター！　まだお仕事が残って……」

そんな時に、このミーボが素早く足元へすり寄ってくるのを見てアーミヤは何というだろうか？

想像してみよう。ロサがお茶会しに来るとする。

「ドクター！　良い紅茶が入りましたの。ご一緒にお茶会……」

なんて時に、この悲しきモンスターがウルサス式腕立てしながら視線を合わせているのを見てロサは何というだろうか？

想像してみよう。スズランが差し入れを持ってきたとする。

「ドクターさん！　お仕事お疲れ様です！　今日はおいしいシフォンケーキを作って

……」

　こんな時に、このソドー島の悪夢が完璧なエイサイハラマスコイ踊りを披露しているのを見てスズランは何というだろうか？

　こんなもの預かって来客にパニックを植え付けていったら間違いなく折檻モノだ。それだけではない。それでとんでもない噂が広まってしまったら取り返しのつかないことになる。最悪ケルシーに殺される。いや最最悪で私が弾劾される。

　だが預かるのを否定したら今のメイヤーに詰め寄られる可能性が高い。生きては帰れるだろうが私のＳＡＮ値が持たない。もう残業で神経がすり減ってるのにそればっかりは絶対避けたい。

　二律背反。二進も三進も行かない。だが私は腐ってもドクターだ。窮地に陥ってこそ天啓的戦術が舞い降りてくるのだ。それこそ……

「戦場のピンチに投入させれば、ニューモデルのイメージアップにつなげられるだろう」

（そしてメイヤーの参戦を引き延ばしてうやむやのまま終わらせる……）

　天啓的戦術と銘打ったが要は俗にいう引き延ばし。このような状況ですぐさま理由をもひねり出すのは至難の業だが、そこはドクターたる私の采配。

「なら数日のうちにでも出撃メンバーに入れてよ！　今すぐにでもこの子たちのニュー

モデルをお披露目したいんだ！　それに実戦データもたくさん取りたいんだよ！」
「それはダメだ。数日じゃとても難しい。私としてもこんな素晴らしいミーボたちを何とかしたいと思ってるんだが……」
　ここで反対意見の押し切りは悪手。この状態のメイヤーは話を押し切ろうとしても変な角度からの反論でなかなか折れてくれない。私には少なくとも今の彼女を相手に力押しできるほどの根気は余りない。ここは受け流す他はない。
「数日は？　じゃあ少しかかってもいいから1週間でどう？」
「……1か月ならどうにか」
　ここで真剣に考える姿を取る。勘違いしてはいけないがこれは別に彼女を騙そうとしているのではない。ただ偶然返答の素振りがそう思わせてしまう様な感じになってしまっただけだ。そうただの偶然だと弁明はしておこう。
「……なら2週間で！　2週間はどう!?」
（2週間か……まあそれくらいならメイヤーもさすがにどこかで睡眠を入れるだろう。素面に戻りさえすれば考えを改めてくれるはず）
「……分かった。なんとか2週間のうちに出撃計画の中に入れておくよ」
　ポットがお湯が沸騰し終わったとピーピー鳴った。そのブザー恩を合図にして、温かくなったカップ麺を手にグラベルの待つ仕事部屋へと戻っていった。

（後はしばらくメイヤーを出撃メンバーに入れないようにすればいい。さて今日は乗り切ったぞ！）

（と、思ってたのに……）

なんでこうなった？

確かに2週間のうちに戦闘に出すことを促した。それでもメイヤーがこんな狂気めいた計画に飽きて、しっかり寝てくれることも期待してたし、その可能性が高いことも予測していた。もし戦闘の打診が来たとしても、意図的に伸ばせばいい。あの悪夢は一晩で終わるはずだった。そのはずだった。

だが何をどう考えれば教官の訓練に敵役として参戦するという発想に辿り着く？それも予備隊を巻き込んでの模擬戦にだ。

そういえば、予備隊を引き合いで出したような気がする。と、芋づる式に次々に可能性を思いつく。ここ数日、沢山の書類を相手に流し作業で裁可事務をやっていた。エスプレッソの3倍増を呑み込んでも取れない眠気と戦いながらだ。あの時は備品の破損報告と教官からの事務連絡だけだと思っていたが、ひょっとしたらそれに紛れていたのかもしれない。なぜなら訓練教官からゲストを呼ぶ分には特殊な書類を用意する必要はないのだが、その逆が行われる際には戦闘指揮官、つまり私の裁可を仰がなきゃいけ

ないという謎ルールがロドスにはあるからだ。

だがそんなこと滅多にないから私はそのことをよく覚えている。その書類を私は……。

どうしたか、という段に入ると何故か記憶がぼやける。何故かよく思い出せないのだ。だがその思い出せないという事実が、すでに私の行った行動の結論であると感じている。やっていないというのなら、それに足る理由を考えだし却下しているはずだからである。その過程すら思い出せないほど、私の記憶喪失は器用じゃない。

手袋の中に汗が溜まっていく感触を握りしめながら、それでも周囲に気取らないよう振舞う。フォリニックやブレミシャインにはドクターの真意が漏れ出なかったようだ。とはいえ、間違いなく被害拡大のシナリオ街道まっしぐらというこの状況。すぐにでも止めなくては、医薬品臭いベッドタウンに大量移住する未来が待っているだろう。

ところで、先ほどの報告を聞いて悶えているのは1人だけではなかった。

「あれ？　グラベルも大丈夫？」

「え、ええ……大丈夫よ」

静かに悶えているドクターのそばではグラベルが目を逸らしている。先ほどの話を聞いた時の軽い表情は見えない。

（なんだか具合が悪そうだと思うけど、グラベルも緊張しているのかな？）

一方のグラベルはというと。
（ごめんなさい、これ多分あたしのせいだわ……）
ドクターの話を聞いてグラベルはある出来事を思い出していた。それはドクターの話の前の出来事である。

あの時グラベルはドクターの執務室へ行く途中だった
。
肩にはドクターから貸してもらったジャケット。室内着の一つであるそれを羽織って彼女は先ほど眼帯の娘と話していたことを思い出す。

「グラベルお姉さん、ありがとうございました！」
「どういたしまして。ねえ、いつも一人なのかしら？」
「ううううん。いつもはオーキッドお姉さんたちと一緒なの」
「そう、それじゃあお使いなの？」
「ううううん。ポプカルね、一人で頑張るんだ。みんな、いそがしそうだからお手伝いしようと思ったの」
「それで自販機のボタンを押そうと背伸びしてたのね」

その手に握られているエナジードリンク、そしてポプカルの顔を見て、グラベルは慈愛に満ちた笑みをこぼす。
「グラベルお姉さん、これ！」
「あら、くれるのかしら？　別にこれだけのことはやってないわ」
「ミッドナイトお兄さんが言ってたの。助けてくれた「れでぃ」にはお礼をしなくちゃいけないって。「れでぃ」は知らないけど、お礼されるとポプカルうれしいの。グラベルお姉さんもうれしい。だからお礼、あげるね！」
「ありがとう。……騎士グラベルこの御礼ありがたく頂戴します」
グラベルはまるで君主に恭しくするように感謝の意を表する。
「……？　どうしたの？」
「なんてね。ただの騎士の真似事よ」
「「きし」？　「きし」ってあのおとぎ話に出てくるの？」
「そうよ」
「あなたの言ったレディを守って戦う人の事よ、ちいさなレディさん」

こうしたやり取りの後、ドクターに頼まれた「強力炭酸！　痺れるアシッドムシ味！」

をポケットに、先ほどのキーホルダーをつまんで眺めていた。元気そうな汽車のキャラクターが煙を噴き出している姿だ。これを渡してくれたあの子は「レディ」と言うとにっこり笑った。その情景を思い返せば明るい気持ちになれる。心も体もあたたかく包まれていた。

「あいたっ！」

「あ、ごめんなさい」

唐突に出てきた作業着のエンジニアにぶつかってしまう。気付いて躱すことが出来ないほど浮かれていたようだった。……いやもらったキーホルダーが無くなってる。すぐに落とした贈り物を拾う。そして気を引き締めながらドクターへのお使いを終わらせるため急ぎ足で向かった。

（まさかあの時ぶつかった人がこんなこと起こすなんて……）

あの時の出来事がまさか今回の出来事を惹き起こすトリガーになっていたとは。そういえば見せたキーホルダーはデスクの引き出しにずっとしまったまま、本人もその日からどこか調子が悪そうにしていた。横でひっそり悶えるドクターを見て、図らずも心労を増やす発端を作ったことに悶える騎士であった。

こうして神経症予備軍が二人出来上がりそうな診療室の中で、医師フォリニックはそ

のことにつゆも気付かずため息をつく。
「もう……。私たち医療部としてはこの事態の早期解決を図っていただきたいところです。今回は無事で済みましたが、このようなことで医師たちを圧迫するようでしたら仕事に支障が起きかねません。幸いドクターが事情を把握なされているようですので、この件は一任してもよろしいでしょうか?」
「心配ない、任せてくれ」
「ところで2週間後のドクターの健康診断について……」
「あー! あ、フォリニック! ところでドーベルマン教官もいるかな!? 彼女から話を聞きたい!」
「何ですか、教官なら……あ、えーと、申し訳ありませんが教官は今面会謝絶となっています」
「一体何があったのよ……」
じわじわと増えていく不安要素たちにブレミシャインの顔が曇っていく。まだ例のあのロボを目の当たりにしていない彼女にとって、その脅威は未知数だ。いったいどんな恐ろしい姿をしているのか分からないのが余計不安を掻き立てる。
「それなら予備隊の様子を見ておきたい。もう患者から聞き取りはしたかな?」
「詳細な聞き取りはこれからです」

「なら私が聞こう。なんにせよ手がかりが必要だ」
よいせ、と声をかけてドクターは立ち上がった。ほぼ同時にフォリニックが立ち上がり案内する。グラベルもすぐにドクターの傍に続いていく。その後を不安げな顔のブレミシャインが歩調を速めて追いかける。
一行は医務室から予備隊のいる病室へと向かって行った。

占いの結果

ロドス治療室

ラヴァが目覚めたのは白いベッドの中だった。目が覚めてから自分が襲撃に遭って気を失ったことに気付くのにそう時間はかからなかった。浅く息づいて壁掛け時計の針を読む。数十分経っていた。

「あいつら……うぐっ!!」

起き上がろうとした途端に鈍い痛みが走る。体の各所が負傷しているようだ。特に左腕が痛む。起き上がるための支えにした左腕を慎重に戻しながら再びベッドへと体を横たえる。

「最悪だ……ちくしょう……」

右手で顔を覆う。起きたばかりで気付かなかったが、左手以外もケガをしているようであちこちが酷く痛む。先ほど支えにした左腕もよく見れば白い包帯で固定されている。

「やっぱりサボるべきだったんだよ……姉ちゃん……」

ラヴァは日ごろから占いをやる習慣がある。精度はまあまあだが、それでも占いの結

果次第で自分がイケてる日かそうでないかを見てはその日ごとの指針を立てていくには十分といえる。だから今朝もここ近年では見たことのない大凶運の結果を見て、即座に訓練も完全に無視して逃げようと思った。あの時結局ラヴァ最大の天敵に阻まれて叶わなかったが。

朝　ロドス宿舎

日の差すテーブルに7枚のカードがある。そのカードはV字に並んでおり、どこか洗練されたような気持のするデザインがあしらわれている。そのカードを根本から左へとめくる。

「『皇帝』正位置。『教皇』正位置。『死神』正位置。『塔』正位置……いや、まだだ……まだ終わってない……」

これだけでもうため息をつきそうなカードだが。まだそうと決まった訳ではない。右側のカードもめくっていく。

「『審判』正位置。『世界』逆位置。そして『星』正位置」

ダメだ。今日は終わった。このようなカードはよろしくない。急いで出よう。

「ラヴァちゃん！　今日の訓練はサボっちゃだめだよ！」

「やめろ！　放せ！　今日は運気が最悪の時なんだよ！　アタシは逃げる！」

「そうやって逃げようとしてもダメです！　お姉ちゃん許しません！」
「分かった！　分かったから肩を掴むなよ！」
「あ！　ごめん！」
　そう言うと肩から手を放す。あーくそっ、よりにもよって痛いとこ掴みやがって。掴まれたとこがヒリヒリしてる。
「いってぇ……何で今日に限って引き留めるんだよ？」
「今日じゃなくても逃げようとするでしょ！　もう！　いつも一人で動こうとして……！」
「あのな？　本ッ当に最悪なんだよ！　今日は！　これ見ろ！　これ！」
　テーブルの上をもったいありげに指さして示す。テーブルにはカードがＶの字のまま置いてあった。
「んー、お姉ちゃんは占い詳しくないから分からないけど……これのどこがダメなの？」
「中央が安定。左へ行けば尊敬、終了、崩壊。右に行けば再挑戦、不完全、無気力」
　大分端折った説明だが、ラヴァは未来占いの結果を伝えた。
「分かりやすく言うとな、『理不尽な災厄が降りかかる。身近な者、親しい者といれば更に災厄が訪れる』ってコトだ」
　今まさに降りかかってきたけどな、という言葉は何とか呑み込んだ。

「だから今日の訓練は参加しない方がいいんだ。イイだろ？　今日ぐらいサボったって」
「でも今週の訓練で教官が訓練に出ない人のいる隊は休日返上の訓練だって言ってたよ？」
「おい待て、そんなの聞いてないぞ」
「この前戦闘ログ見てるときに言ったでしょ？　聞いてなかったの？」
「……聞いてた」
　勿論覚えている。あの時Ｐｉｔｈさんの戦闘ログを研究していたからだ。その時ハイビスと幾つか話をしたような……気がする。
「じゃラヴァちゃんも行かないと！　ほら！　早く支度しなさい！」
「やめろよ！　分かったから押すな！　ほら外で待ってろよ！」
「うん待ってるね！」
　急かす姉ちゃんを外へ押し出し、ドアを閉める。ったく！
（あーくそ！　こういう時って本当にツイてないよな！）
　アーツロッドの調子を見ながら毒づく。いつもこうだ！　大体悪い時にはとことん悪くなる。今までだって最悪な時はいつだってそこから逃れられたためしがない。大地の意思に定められた運命みたいに姉ちゃんが引きずり込もうとしてくる。

だからもうこういう時にはすぐに割り切った方がいい。しっかりとロッドをケースに納めると部屋の出口へと向かった。だがその前にテーブルに広げられたカードが目に入った。

（まあ、あっても困るモンじゃないしな）

デッキを箱に戻し、ポーチに入れた。そのまま姉ちゃんの待つ出口へ向かう。

「待たせたな……ガッ‼」

ドアがスライドした影から、長いケースが勢いよく伸びあがりアタシの顎をしたたかに打ち上げる。しかも舌も思いっきり噛んだ。不幸中の幸いにも血は出なかった。

よろけたアタシがぶたれた箇所を覆って犯人を見れば、小瓶をポーチにしまおうとするポーズのまま姉ちゃんが固まっていた。つまり、拾って立ち上がろうとした瞬間に背負ったアーツロッドが、偶然扉の先にいた妹の顎にカチ当たったってことだ。

「ご、ごめんね！　ラヴァちゃん！」

「もういい……何もするな……」

隊全体の罰なんか放ってすぐにでもバックレたいと思ったのは悪くないと思う。

（でもまあ、今までアタシにしてきた仕打ちにしてみればこの位……）

今までのツケが来ただけなんだ、と漏らす。親しいものの距離感でなら聞こえるくら

いの声量だ。だが出している本人には何となく聞かれているような心地がしたので、そのまま黙って周囲の物音を窺う。

……。

……。

やがてこの部屋にいるのがただ秒針だけと知ると、ほっとしてしばらく天井を見つめていた。その間ラヴァは色々と思い返す。

占いの結果に、きつい仮想敵訓練に、よく分からない奴の参戦に、歪んだヤバいオーラ、ミーボとかいうロボット、奇襲を受けて倒れされる味方、姉ちゃん。

（姉ちゃんは？）

ふいにラヴァの頭にハイビスの顔が思い浮かぶ。今朝方の姉の顔、いつもは元気がありすぎてウザいくらいに関わってくる明るい顔。そういえば隊を分けたきり見かけていない。

もしかするとハイビスも襲撃を受けて自分の様に寝込んでいるかもしれない。場合によっては重態になってるかも……

（そんなことはないな。いつもうっとおしい位に元気で、自己管理が完璧なアイツのことだ。そんなひどいことにはなっていないはず……）

だが占いの内容が続いて脳裏を掠めた途端、絶対に大丈夫だと確信できる何かが少し

ずつ失われていき、代わりにじわじわとした焦燥感がラヴァの身体をこがしていった。あたかも崩壊寸前の塔に立つ小人のような心地である。

『理不尽な災厄が降りかかる。身近な者、特に親しい者といれば更に災厄が訪れる。打開のための行動は思うように進展しない。大事なものが失われる結果に終わる』

違う……違う……。ヴィクトリアの時のようにはならない……。

チッ、チッ、チッと時計の秒針だけが部屋に響いている。まるで何かの制限時間を刻んでいるかのような意趣で奏でられるかのように聞こえる。そんな音に満たされた部屋の中で、ラヴァはここにいてはならない思いに駆られていた。やがて我慢の限界が来ると、まだマシな右手で勢いよく起き上がろうとした。

そのタイミングでドアが開く音がした。誰かが近づいてくる。不透明な厚いプラスチックの衝立が立っていて体の概要しかわからないが、全身黒づくめというだけでカンニングには十分だった。起きてるとラヴァが応えると、その目算通りの人物、ドクターがやって来た。

「大変だったね。……ああ、無理に起き上がらなくて」

ラヴァはその呼びかけが終わる前に身体を起していた。制止の声を留めていたドクターはその続きを言う。音量は明らかな控えめにして。

「……いい。……調子はどうだい？」

「……大したことない」
「右肩に擦過傷、右手突指、両足は捻挫、背中にも打撲の形跡あり、おまけに」
近くのスツールへ腰かけ、一呼吸おいてから続ける。
「左腕上腕部には2か所ひびが入ってる。君のような怪我が大したことないのかい？　そんな訳ないだろう。ここまで見てきた中で一番の重傷者だ」
バイザーの奥は見えない。だが鋭い視線が向けられているのが分かった。ドクターは手を両膝の上に置きしっかりした姿勢でラヴァに対面している。
「そんなに深刻になるもんじゃないだろ？　アタシは」
「そういうことを言ってるんじゃない、自分の体をもっと大事にしろってことだ。いいね？」
凄みのある、それでいて静かな声。しばらく何か言いたげだったラヴァだが、「偉大な術師には必要なことだよ」とドクターがつけ加えるとしぶしぶながらも「ああ」とだけ答えた。
「分かってくれたようで何よりだ。それより、体が痛むだけか？」
「特に、何もない」
「本当に？」
「本当だ」

「ふーむ……」
　顔を左に少し向けてラヴァを窺い見るドクター。
「何だよ、まだ信じられないっていうのかよ」
「いや違う、精神的ショックを受けていないな、と」
「ショック？」
「ラヴァ以外のオペレーターは概ねそっちの症状が見られている。酷いのに至っては未だに意識不明の状態だ」
「そうか……」
　彼女が目を伏せる。僅かにだが視線が左右に揺れているのが分かる。ドクターの目には何かを言っていいのか迷っているように映った。
「先ほどハイビスカスに会ってきた」
　ドクターは食わせ気味に彼女の姉の名を言う。
「そこそこ怪我を負っているが君ほどじゃない」
「……そうか……そうなのか……姉ちゃんは無事なんだな」
「ああ。だからそう気を落とすんじゃない」
　ラヴァは何とも返さなかった。
「さて、お姉さんの心配で弱っているとこ悪いんだが」

「よ、弱ってなんかねえよ！　アタシはただ……！」
「分かってるさラヴァ。分かってる、がメイヤーの事について聞きたい」
「言っとくが、アタシはアイツの事なんかよく知らないぞ」
「こっちは早いうちにメイヤーの暴走を止める必要がある。聞いたこと見たこと、有益な情報は教えてほしい」
「聞いたこと、見たこと……か」
　手を差し出して促す素振りのドクター。それを承けてすぐに思い当たることを探すラヴァはいくつか気付いたことを報告した。

「アイツは妙な形のロボットを使役していた。犬と機関車をくっつけたようなヤツだ。……アイツはいつもあんな感じなのか？　違う？　……いや聞いてみただけだ」
「姿形も奇妙だが、舐めたらマズい。アイツは予備隊の半数を行動不能にした。一体一体は大したことはないが連携が上手く取れている。自動操縦であそこまで動くのか？」
「アイツは新しいロボットにご執心だったようだぜ。『布教』とか『マーケティング』とか。そんな事。どこへ向かったかは見当がつかないな、すまない。……いや、何でお前が謝ってるんだよ」

そうして情報調査から5分経った頃。ドクターは立ち上がった。
「なるほど、分かった。有用な情報をありがとうラヴァ。役立ててみせるよ」
「……おい、他の奴からは話を聞いたのか？」
「グラベルとブレミシャインも他の予備隊に話を聞いてる。心配はいらない」
「ドクターはどうなんだ？」
「……君で最後だ」
彼女の目線はドクターの中を見透かすように鋭い。予定よりも聞き込みを終えそうであることを知っているかのようだ。ごまかすにはあまりにもドクターは拙すぎた。
「そうだ、一つ聞かせてくれないか？　今までに話してきたオペレーターたちは多かれ少なかれあのロボットたちの影響を受けている。だがなぜラヴァはあれと顔を合わせて平気でいられるんだ？」
「アタシだって何の影響も受けてないわけじゃない。実際アイツらが纏っていたオーラは歪みきって気分が悪くなったくらいだ」
「確かにあの悪魔合体は鳥肌モノだが。それにしたって君は酷く手傷を負わせられた割には、質問にすらすら答えられていたよ」
「……覚悟していたからだな」
どこか独白しているかのようにラヴァは語っていく。

「アタシの占いは、最悪な時ほどよく当たる。いくら避けようとしても、占いの通りになっちまうんだよ。だからもう始めっから覚悟しちまうんだ。最初っから身構えしちまえば、避けようと色々と無駄に足掻かなくていい。それに逃げ道がないって分かれば必死になれる」

たどたどしく話すラヴァは顔を挙げて何かを考えている。その表情は過去を思い返しているように思える。いつの間にかドクターは座りなおしていた。

「……ラヴァ」

「……なんだよ」

「おまえ何か変なモノ拾い食いしたか？　らしくないぞ。君がデレるなんて」

「っ、っせぇな！　殺すぞ！」

「そうかー！　君、私をそんなに信頼してくれてたんだね！　ドクター嬉しいよ……」

（くそっ、こいつも地味にうっとおしいの忘れてた……）

そう言うと大げさに泣き真似をしてみせるドクター。全く違うアングルで話を聞いてたドクターに真っ赤になる。ラヴァの中ではハイビスもドクターも面倒臭さという点で同格の存在であった。

「いい加減にしろよドクター！　今すぐにでもお前を……」

「もう一度占ってもらえないか？　ラヴァ」

「……は？」

唐突に出されたドクターからの提案にラヴァが固まる。

「残念ながら我々には手がかりがほとんどない。探そうたってこの広大なロドス号を手探りで探すのは無理がある。だがこのままだと職員たちがパニックになる恐れが大きい。手をこまねいている訳にはいかない」

「あ……ああ……そうだな……分かった」

「占いの道具はどこに？」

「アタシのポーチの中にある……」

先ほどとは打って変わって冷静で真面目な調子のドクターに、ラヴァは困惑気味で占い道具の場所を教える。ポーチを取りに行く黒い背中を見て何と掴みどころのない不可思議さを感じ取っていた。

病室に響く秒針の音がテンポを緩めていた。

一方フォリニックのいる診察室前。

「……え、そんな感じの見た目なの？　むー……なんというか、すごい……発想だよね」

「あたしも想像つかないわね……奇妙さは感じるけど、トーマスとの合体でトラウマが刻まれるものなのかしら？」

「うーん、私としてはメイヤーさんがこんな改造施すとは思えないけど」
「ひょっとしたら理性が足りなかったんじゃないかしら？　ドクターもたまに『理性が足りない』とかいって奇行に走ることがあるんだし」
「そうかなぁ、そんなことは……うーん……以外にありえるかも」
「ね？　ありえそうでしょ？」
　一足先に戻っていたグラベルとブレミシャインはドクターを待っていた。診察室の前で2人はベンチに並んで腰かけている。
「……遅いわねえ……どうしちゃったのかしら？」
「そうよね……ちょっと遅いかな……」
　思っていたよりもドクターが遅れていることが2人とも気になった。手がかりになる情報が見つかったから遅くなっているだろうとは思ったが、それにしてもやはり遅い。
「ねえブレミシャイン？　あなた収穫はあった？」
「うーんと……これと言ってあまりいいのは聞けなかったよ……。私のトコは特に落ち着きがない人ばかりで……」
　やや苦笑いで答える。偶然というか、彼女が聞き込みを行った被害者たちはよりによってトラウマ直前の状態の者が多かった。小さな物音がするたび怯えて抱き着いて

いたコータスの少年の事を思うと、事細かに報告するのも気が引けた。それを差し引いても有力な情報が集まらなかったのは事実である。

「ってことは……グラベルさんのが重要な手がかりってことだよね」

『予備隊に相当数破壊されたロボットを補充しに行った』っていうから、一旦ラボに行ったんでしょう」

「それならまだ余裕はあると思う。訓練場からなら距離６６０ｍ、エレベーター２本待たなきゃいけないから早くて１１分はかかるわ」

「あら、随分詳しいわね。足？く通ってたことは聞いてたけど、道のりも把握してるのねぇ」

「本当元ライン生命のチーフエンジニアやってただけあって、発明品一つとってもとても勉強になるの！　問題解決のために素材１つとってみても１０の発見が見つかるくらいで驚きが止まらないの！　今も見学申請してるところだけどなかなか本人が忙しいせいで受け付けてくれないんだ！　でもロドスの加工所全部見て回りたいと思ったら……」

　ブレミシャインはロドスの中でも重度のメカマニアとして知られている。来てばかりの頃はロドスの加工所を見て回った時、職員に質問攻めをして困らせたことがある。しかも何度も暇な時間を縫ってはこの加工所に足を踏み入れてくる。たちまちメカ狂

いのイメージが付くくらいにはブレミシャインの行動力は凄まじかった。そんな火のついた彼女の話を、グラベルは楽しそうに聞いている。
「うっふふふっ。あなたって本当に機械が大好きなのね。あの耀騎士の妹だって聞いていたから凄いギャップを感じちゃうわ～」
「あ、ごめんなさいグラベルさん……つい私……熱く語っちゃって……」
「大丈夫よブレミシャイン。それと私の事はグラベルでいいわ」
「分かった！　グラベルさん……じゃなくてグラベル！　でもあぁ……私は何の情報が得られなかったのがなぁ……」
「仕方ないじゃない。むしろあたし達と一緒に来てくれただけでも十分役に立ってるのよ」
「へ？　本当？　あたしが？」
　目をパチクリさせて自分に指差しまでして確認するブレミシャイン。
「本当よぉ。ドクターはあなたが来てくれさえすれば即戦力になるって言ってたのよ。他にもクロージャさんにも協力をお願いしたみたいだけど断られちゃって、困ってたとこなのよ」
「そうなの？　ドクターが!?」
（あ、この娘すごい面白いわ）

満面の笑みを隠し切れなくなっていく金の騎士。それにつられて笑ってしまうピンクの騎士。
「グラベル、ダメだろ裏側を話しちゃうなんて」
「ドクターおかえり！　やっと来たね！」
「あらドクター、あなたが遅いのが悪いのよ」
「メンタルケアも務めていたら遅れたんだ。許してよ」
やっと3人になったところで何ともなしに歩き始める。ライトブルーの区画通路をゆっくりと歩いていく。
「歩きながら作戦会議でもしようか」
先を歩くのはドクター。黒いブーツの音を響かせながらしっかりとした足取りで進んでいく。それに騎士たちも従い歩いていく。
その隣、やや後ろに控えて付いていくのはグラベル。僅かにずらした足音と共に進んでいく彼女の顔は、やや影が蔽っていたがどこか自信が漂っているようにも見えた。
二人の後ろを歩いていくのはブレミシャイン。光を纏った鎧はシャラリシャラリと小気味よい音を鳴らしてついていく。
しばらくしてドクター達の影が黒い通路へと入っていった。

ところ変わってとある治療室。
「ごめんなさい。あなただけ別室になってしまいました」
「いいよ。そんなに気にしてないから」
フォリニックは経過観察のためにラヴァの治療室へと足を運んでいた。
「あなたの怪我は予備隊の中でも酷いほうです。しっかり治るまで絶対安静にして下さいね」
「分かった」
「……？」
「……なんだよ……アタシの顔に何か付いてるか？」
「いえ何でも」
「……いつアタシは出られるんだ？」
「早ければ2週間ほどで退院できますよ。……あら、テーブルの上に……これは占い？」
「なんだよ。無理な動きはしてないぞ」
「別に責めている訳じゃないんです。大丈夫、あなたの努力次第ではもっと早く出られますよ。何かあったらベッドのボタンを押してください」
それではといってフォリニックが出ていった。彼女の形をしたモザイクが白いドアで閉ざされるのを見届けると、ラヴァはため息をついた。

「一体何を話したんだよ姉ちゃん……」

ゆっくりとベッドに身体を沈めるラヴァは先ほどの占い相手の言葉を反芻する。テーブルにはV字に並んだ7枚のカード。今朝の占いとほとんど変わりはしなかった。

『ラヴァ、私も覚悟ならしている。覚悟しているから、尚更人の事を頼るんだよ。例え運命で先のことが定められていたとしたって、打開することをあきらめない。そんな覚悟ができる人たちが、君の周りにいるだろう?』

今朝のカードは、中心が「皇帝」の正位置。片方へは「教皇」正位置。「死神」正位置。「塔」正位置。

『それでも無理なら私に頼ってくれ。私は君のドクターだからね』

もう片方へは、「審判」正位置。「世界」逆位置。そして「星」正位置だった。だが今は一枚だけだが違う。やっとだが希望が向いてきたようだ。窓の光が差し示す逆さまの星を見てラヴァはそう思った。

方針確認

「まずは遅れてしまったことを謝りたい。すまなかった」
「いいわよドクター」
「私も気にしてないよ」
「……二人ともありがとう。ただこれだけは言っておきたくってね」
　そしてドクターはすぐに歩き始めた。二人の前を歩く足取りはしっかりと見えない白線を踏み続けているかのように安定している。そこに二人は従って行った。3人だけが白い廊下を進んでいく。
「何か情報は？」
「一つだけ。予備隊の一人が彼女を見たそうよ。補充しに行くって言っていたから多分ラボね」
「そうだろうね……訓練場には何体か破壊されていたらしいし、すぐに取りに行ったんだろう」
「ブレミシャインによれば最低でも11分かかるらしいわよ」
「そうか……よく把握しているねブレミシャイン。助かる」

「ええ！　このくらいでドクターに役立ってもらえるなら何でもしてあげるわ」
　頼みにしているよ、といったドクターだが突然何かを思い出したかのような顔つきに、いやハッとしたように顔をあげると彼女に振り向く。
「何か気になったことでもあるの？」
「そのルートはエレベーターを２本使うものかな？」
「うん、そうだけど。どうしたのドクター？」
「今日はエレベーターが朝から故障してしまって点検作業が入っている。だからどう考えても１１分以上……いや多分２０分以上はかかるはずだ」
「……てことは、メイヤーさんはまだラボに行く途中でいる可能性もあるのね」
　ブレミシャインの出した１１分は最速でいった場合の時間である。もちろん本当のところは何か道中で時間を食う可能性だってある。例えばエレベーターなら待ち時間が発生するかもしれない。加えて今メイヤーは正常な判断がつかない状態にある。もしかしたら道を間違っていく可能性もなくはないだろう。かなり偏った希望的観測でしかないが。
「とにかく私たちも急いで向かった方がいいわね……」
「うーん……そうよね。そのルートが使えないとなると……、ラボ・ルトラのある棟までは中央吹き抜けまで行ってエレベーターを使うか、端っこの非常階段を使うか、後は

……他にはない……と思うわ」

話を聞きながらドクターはしばらく沈黙する。右手の薬指と小指が小刻みに擦り合わされる。その余りにも微細ながら独特な癖は普段ドクターの指揮する姿を見ている二人には、ドクターが様々な予測を立てている時にする癖だと分かっている。恐らく彼の思考はいかにこの深夜テンションの産物を手短に解決しようかということに振られている事だろう。それにしても今の状況にどう向き合うべきか、ブレミシャインは真剣に向き合うことをしながらも、空回り気味ではないかという気がとりきれずにいた。

「そう言えばドクターの方はどうだったのかしら？」

そう言われてドクターは先ほどやってもらった情報提供を思い出す。

「……まだあまりピンと来てないがもう少し説明してくれないか？」

テーブルの上のカードの絵を見ながら言うと、ラヴァは「しょうがねぇな」と呟いた。

「まず言っておくが、これはこの先起こりうるって可能性を示しているだけだ」

黒いバイザーが頷く。

「まずは一番初めに行動を起こすとき、スピードを求めようとしないことだ。つまりゆっくりやれってことだな。思わぬ助けが手に入ると出ているようだ。それから計画性をしっかり立て対処にあたることも必要だ。って今更いう事でもないよな」

「……そうだな」
「後は……。いや……」
「まだ何かあるのか？」
「あー……『光』と『3』がこの事件を解決するカギだと出ている」
「……？」
バイザーに電光板があったら「？」が浮かんでいそうな、そんなリアクションだった。
「聞くなよ？アタシだって知らないんだからな。とにかくこれで占いは全部だ」
ラヴァはカードをまとめると、またカードを切り始めた。去り際に声をかけるが、ラヴァは「ん」と言ったきり一心にカードを混ぜ続けていた。ドアを閉めるときにもう一度振り返ってみたが、もう仕切りが彼女の姿をぼかしたまま佇んでいた。音が立たないようにドアを閉めると、静かに一人戻っていった。

「あーっと……なんと説明すればいいのか……」
「マリア！　やっぱりあなたなのね！」
「ひゃん！」
余りにも聞きなじみのある声にブレミシャインの背中がビクッと跳ねる。その声は鞭のようにしなる蛇腹の剣を思い起こさせた。そしてその武器を持つ人物がブレミ

シャインの脳裏でズームアウトされるように連想される。鞭のようにしなやかで強靭な腕。チェスのナイトをあしらった黒くも、そして大きな胸当て。暖かくも厳しい空色の瞳。容赦なく叱咤する口。プラチナブロンドの髪に、角の様に聳え立つ耳。ウィスラッシュの怒った顔がありありと浮かぶ。一通り思い浮かべてみたところでぎこちなく振り返ってみれば、やっぱりウィスラッシュがいた。怒った顔もそっくりそのままだ。

「見つけたわ！　丁度いいところに……ドクターまで……！　ドクターも手伝ってたのね！　まったくもう！　二人とも今日は訓練に付き合って……」

「ま、待って！　おばさん！　私はいま……」

「言い訳無用！　一緒に来なさい！」

　ブレミシャインが手を掴まれて引っ張られて行かれるが、ウィスラッシュの行く手に黒い手が待ったをかける。

「すまないウィスラッシュ。ブレミシャインは今連れていかれると困る」

「ドクター？　あなたもここのところ運動をサボっているわね？　仕事が忙しいのは分かるけど、適度な運動をしてないとその内身体が動かなくなるかもしれないわよ？アタシも付き合ってあげるから訓練場に来てくれないかしら」

「あー……また今度にしてくれないか、ウィスラッシュ？　今は手が離せないんだ」

「ドクター直々に必要な用事って何なのかしら？私にも聞かせて下さるかしら？」
　疑われているな、とピンと立つクラミミを見て感じる。納得できなければつかつかとその傍を通り過ぎようとするだろう。ドクターはそう考えた。腕を掴まれて連れていかれそうになったブレミシャインは頻りに目をやっている。ドクターは間を置かずこう呼びかける。
「……教官の様子はどうだった？」
　大きなクラミミがぴくっと反応する。当たりだ。
「よく分かったわね？」
「『丁度いいところに』と言っていたからだね。君が医務室に行く用事と言えば、教官の見舞いだと考えてもおかしくはないだろう？」
「そうね。でもそれ、今関係あることなのかしら？」
「大いに関係あり、だよ。私達はこれから教官をあのようにした問題を解決するつもりでいるんだ」
「そのためにマリアを連れていくの？　ほかの誰かじゃダメなの？」
「ダメだ。だがさすがに三人だと骨が折れると思っていたところだからね」
　黒い手が差し出される。
「頼む、ゾフィア。手伝ってくれないか？　君の協力が欲しい」

空色の瞳が差し出された手を真っ直ぐじっと見つめる。しばらくしてからブレミシャインを掴む手を緩めた。
「そうね……今日の夜は空いてるかしら？」
「……3時間くらい作れそうだな」
「私も手伝うわよ。任せられる書類仕事くらいあるでしょ？」
「えーと……これ以上無理しなくてもいいよ。休暇だよね？　気持ちはありがたいけど……」
「そうゆう事じゃないのに……、もう。　気にしないで。　その代わり、ドクターも訓練場には来てもらうわ」
「そう来たか……分かった。それでいこう」
こうして両者の手は結ばれた。その様子を見ていたブレミシャインは、なぜ自分の伯母さんが心なしか怒っている様なのか、なぜドクターの手癖がさっきよりもひどくなっているのか分からずにいた。
だが、ともかくもこれで彼女の訓練に引きずり込まれることはなくなった。振り返り、グラベルのもとへゆっくり向かおうとすると背後から肩を掴まれた。ブレミシャインの顔がぎこちなく後ろへ向く。
「言っておくけれど、マリア。あなたもよ」

表情では笑みを作っているが、目が笑っていない。どうやら逃げられないようだと悟ったマリアはすんなり抵抗を諦めた。その様子は母ネコにつままれた子ネコのようだったと後にグラベルは語ったという。

新たに一人加わったところで、ドクター一行は早々とした足取りでメイヤーの通る可能性が高いルートを進んでいた。オペレーターやロドスのスタッフなど時折出会った人たちにメイヤーの事を聞いてみるのだが、どうやら一定のルートを辿らずにふらふらしているようだった。ともかく被害者が未だに発生していないことは確認できたが、奇妙なことにミーボの姿が確認できていないようだった。

「ミーボが消えたのは、変じゃないかしら？　いつも作戦行動の時には連れてきているのに？」

「あ、あぁ……徹夜漬けなのが影響しているとしか考え付かないかな」

「あら、他の可能性もあるんじゃないかしら？　例えばミーボに宿ったトーマスの怨念がメイヤーさんを狂わせたとか」

「……B級ホラー映画？　グラベル合わせなくていいから……　いや、たぶんそれくらいぶっ飛んでいそうか……」

「なんかありそうな話かも……うぅ……そう考えるとちょっと怖いかも……」

余りにも世間離れした、いやそれ以上にどこか踏み外したような推測。その反応もどこか踏むべき場所を踏んでいないようなものである。ドクターは首をかしげながらもグラベルの仮説に賛同しかけているし、ブレミシャインはと言えば少しばかり冷汗をかいている。

「二人とも何馬鹿なこと言ってんのよ。一人のオペレーターに迷惑行為をさせないよう注意するっていうだけの話でしょ？　別にB級どころか映画の冒頭にすらならないでしょ、こんなこと」

ぴしゃりとウィスラッシュが二人につっこみをいれる。少々呆れたような声色だ。

初めはドクターたちの問題解決について乗り気だった彼女も、その詳細が分かるにつれ些か気抜けしてしまっている。それでも予備隊の被害を見たために同行はしてくれているようだ。最も彼女はそれだけのために付いてきているわけではないが。

確かに今回の件は言ってしまえば一人のオペレーターの不始末であると言えるだろう。それでも始末書を書かせ、医療部に突き出してメディカルチェックを行わせる程のことをする必要はあるが、別にこんな大所帯で向かうことはないだろう。

それが出来ないのは、ドクターがメイヤーと深い交流のある人物として彼女の事を良く知っているからであるだろう。それに他の者だったらここまでの事はしなかったかもしれないが、メイヤーだからこそやらなくてはならない理由も確かに持っていた。

「それでも、だ。そうでなければ昼食も午後の予定も抜かしたりはしないよ」
と、近くでクルルゥと音が鳴った。ふと音のした方へ向いてみると、そこにはお腹に手をあてたブレミシャインの姿があった。周囲の目が集まったことに気付くや否やニアールも顔負けの速さの両手で顔を覆った。しかし動揺を抑えきれていないのか、淑やかを感じられる白い指の隙間から真っ赤なほっぺたと動揺した瞳が隠せていない。
「あーすまないね、ブレミシャイン……」
「マリアしっかりなさい！　もう……」
「ご、ごめんなさい」
「ふふっ、しょうがないわねぇマリアちゃんは。ドクター、後で彼女のためにおごってあげましょう？」
クカァァー
「……そうしようか、グラベル。二人分でいいか？」
余裕の笑みが恥ずかしさに染まっていった。もし小さく頷かなかったら髪と顔の区別がつかなかっただろう。

犯人はメイリイ

自販機のドアがようやく閉ざされ、鍵が掛けられるようになるまで職員たちはずっと缶を床から拾い上げては戻す作業を繰り返さなくてはならなかった。その作業を終始見守っているのは切れ切れに灯っている天井灯だった。最後の一つを手に取って俺――――ブレナンは最早いら立ちすらその作業に使い切ってしまうと思えたくらい長らく時間がかかった。

（なんとか終わったな……）

普段であれば俺は自販機に飲料を補充する仕事を終えて、ゆっくり昼食をとっているはずだった。それが機械の故障で台無しだ。缶やらペットボトルやら廊下一面に散らかってる光景があったら誰だってそうなるだろう？　しかも商品がひとりでに吐き出されている自販機を見たらなおさらだ、さっさとエンジニア部門に連絡をかけることだった。一通りのやり取りの内に担当者が来ることが決まり、通話を切って改めて様子を見ればさっきよりもっと増えていた。ただ放って待つわけにもいかねぇ。代わりのヤツを呼んでしばらく床に溢れた飲料を片付けていると向こう側からこちらに目指してやってくる人影を見つけた。その人物はある程度まで近づくとおもむろに声をかけ

てきた。
「大変なことになってますね。何でこんなことになったんでしょうか？」
「知りませんよ、俺が来た時は既にこのザマでしたんで。……ところであなたは……エンジニアの？」
「ええ……私が派遣されてきたエンジニアですよ」
「一人だけ？　他に来たヤツはいないんですか？」
　新しくやって来たヴァルポの男はゆっくりと辺りを見渡していった。
「来たのは私だけみたいですね」
　俺は内心溜め息をついた。もとより面倒な作業が嫌いな性分で、しかもやって来たのが悠長そうな奴。ニット帽をかぶっているから俺の耳が嫌そうな形をしているかは知られていない。いや最も知ったところでこのひょろっちい男には何のことだかわからねぇだろうが。そんなことを知ってか知らずか工具箱を携えた彼は自分の胸元を探って社員証を引っ張り出そうとしている。
「申し遅れました。自己紹介をした方がいいですよね？　えーワタクシは……」
「あー大丈夫だ。自己紹介は後にしといてくれ。それよりもコイツを片付けてくれないか？」
「あっ、はい。分かりました」

結論から言えば修理はアイツ一人で十分だった。彼がドアを開け何やら内部の機械をいじると、すぐに自販機から飛び出してくるペットボトルの群れが消えた。機械にあまり明るくないが、それでもアイツの作業は俺でもわかるくらい手慣れたものだった。まるで手品だ。だが結局出してしまったものを全て片付けるのは二人でもなかなか骨の折れる作業であることには変わりない。それでも３０分も満たないうちに商品は全て収まったが。

「大してかからなかったな」

「あ、待ってください。動作チェックをするのを忘れてました」

と先ほど修理をしたエンジニアがおもむろにボタンを押し始めた。ブレナンは遠巻きにそれを見て一瞬止めようと考えたが、なんとなく面倒な気がしてそのまま作業を眺めていた。まあ、そう直した先から故障するはずがないだろう。もしそんな自販機があるのならとっくにスクラップになっているはずだ。そう考えて作業を見守ることにした。今頃代わってくれたヤツは仕事を終えてくれたところだろう。後で何か奢ってやろうか。

「ここまでは順調……『ブレインコーヒー』、『グリーンジェル』、良し。『ボリバルルートビア』、『チャージマンＫＥＶＩＮ』は……良し。次、『秘密の皇帝ーイチジクのタルト味ー』、良し……」

名前を一々読み上げながらボタンを押して確認する姿を見ていると余計に退屈みを覚えて仕方ない。気付けば飲料の名前から味を想定している。ただそれにしてもこの自販機まともな飲料が入ってないじゃないか。ロドスにも得体の知れないゲテモノ好きがいるものだな。噂じゃドクターが買っている姿を見たとか。

『強力炭酸！　痺れるアシッドムシ味！』……おわっ！」

妙な声がしてふと見れば何かが俺の横をかすめて飛んできた。顔のそばだ。サッカーのシュートの様に飛んできて壁にガンッとぶつかると、そいつは中身をあたりへぶちまけた。

「ぶはっ！　目が！　目に！」

突然の襲撃に身を守るすべもなく顔中にかかる。目にも入った。思わず目を擦ったがそれがまずかったのか余計に痛くなってきた。なんとか擦りたくなる気持ちを押さえて痛みに耐えるしかない。

（クソっ！　炭酸が弾ける感覚が肌に広がっている。かかっている部分がヒリヒリして仕方ないが、ここは我慢するしかねぇ。鼻で吸えば薬品臭い臭いがプンプンしている。しかもなんだか妙に甘ったるいような……オアッ！）

このまま吸い続けると吐き気がしそうだだから俺は口で酸素を確保するが、今度はその空気を舌で味わうことになる。飲めない程のゲテモノではないがそれでもオリジム

シのエキスに砂糖と痺れる酸味を混ぜたようなシロモノとしか思えないような味だった。もちろん俺はオリジムシの味なんて知らない。だがそう感じさせる程には十分だ。だってあいつら何かエグそうだろ？　知らねえけど。それも舌をかすめた程度でそう感じるんだから、こいつがいかにヤバいものか分かるってもんだろう。
「だ、大丈夫ですか？」
「ごほっ！　ごほっ！」
「うわぁ！　また壊れた！」
　エンジニアの慌てた声が聞こえる。もう一回直さなくちゃいけないのか、このザマで。すぐに止めるように言おうとするが息を吸っただけでもう動けなくなった。まさか俺が安価な化学兵器を運んでいるとは。というかこいつ選んだ奴は一体どこのどいつだ。
　１８分経過
「やっと終わりました……」
「ああ、２回目はお前だけに任せてしまったようなものだな。申し訳ない」
「いいんですよ。それよりもいいんですか？　シャワーは浴びることもできますよ？」
「大丈夫ですよ。どうせ近場にシャワー室なんてないんですから」
「本当にすみません……」

「もう大丈夫だ」

少し乾いてより強くなった臭いのまま俺は尋ねる。

「なあ、普通自販機ってこんな壊れ方しないよな？」

「いえ、コインを入れていないのに自販機が商品を出してしまう誤作動はありますよ」

「なら顔面目掛けて缶を飛ばすのもよくある誤作動か？」

「普通なら起こりません。というよりもこんなことは初めてですよ」

顔を拭いてある程度ベタベタは取れたものの、臭いは相変わらず取れていない。後でこいつを製造したやつを焼き討ちにしてやろうか。というかなぜこんな化学兵器作ってておかしいとは思わなかったか？　臭いや味を確かめる奴はいないのか……？　いやそもそもそんなクソどうでもいいことなんてどうでもいいんだよ！　考えてるだけでアホになりそうだ。

サイド――――「エンジニア」じゃやりずらいとのことで名前を教えられた。遠慮がちだと思っていたがなかなか出るタイプらしい――――は、初めてのエラーを吐き出したことに暫く考えながらつぶやいている。「またあの人かな。後でスチュワードくんに聞いてみないと……」なんて言ってたから、恐らく心当たりがあるやつがいるに違いない。いずれにしろこの暗殺自販機は代わりが来るまで使用禁止にしたし、今度は動作チェックも済んでいるからまた故障するような可能性はなくなったわけだ。

「とりあえずこいつはこれでいいんだよな？」
「はい。今度は大丈夫ですよ」
サイドの顔を見て確認を取れば、ヤツは一瞬そむけるようなふりをしてこちらに視線を返してきた。探るような視線だったから俺は何を聞かれるのかと身構えていたが、視線を逸らしてこう言った。
「おや、あれはドクターじゃないですか？」
サイドがそう声をかけた。その黒い影を確認してみれば、なるほどドクターのようだった。しかも美人のオペレーターたちもついてきている。

仕込みを入れる

「ねぇドクター？　そう言えばなんで私を呼んだの？」
「そうか、マリアには言ってなかったか」
　唐突になぜ私がそこまで必要とされていたのかが気になって質問をかける。こういう事ならもっと力のある人を頼めばいいのに。するとドクターは思い出したかのように語りだす。
「メイヤーは今回に限らず徹夜する癖があったから、彼女の同僚やミーボたちが止めて寝かしつけていたんだ。それでも時に暴走する時があってね」
「うん、確かにそう……だったよね。でもここまでの騒動になるなんてことなかったでしょ？　一体どうしてたの？」
「普段なら注意くらいで何とかなるんだ。でもここまでになると睡眠薬や麻酔銃で撃って眠らせるようにしている」
「もうソレ人里に下りてきた裂獣の扱いなんだけど？」
「同僚のサイレンス、マゼランが作ったマニュアル通りだとそうなる。続けて2か月くらいでだいぶ慣れてきた」

「．もうどこからツッコめばいいのかしら」
　もう指摘を入れることを半ば放棄したウィスラッシュ。指導すべき箇所を持て余した相手と当たってしまって、諦める以外に道はないと思ったような風だった。一方でブレミシャインはドクターの語った言葉に少し思い出せることがあった。そういえば数カ月前に麻酔銃への改造を頼んできたオペレーターを偶然見かけていた。グラウコスさんに銃の改造を頼んでいたのは青いフードを着たアヌーラの少女。名前は確か……。
「それやってるのってもしかしてアズリウスさん？」
「ああ、そうだ……知っているのか？」
「少し前アズリウスさんからの依頼があったから覚えてたんだ。『確実に仕留められる銃をお頼みしますわ』って」
（まさか同僚を撃つためのものだったんだなぁ……）
　仕事に忠実で気配りのいいアズリウスさんだったからこそ問題なかったが、今度からはしっかり依頼を確認しようと冷汗をかく。だが、その一方でドクターがなぜ自分を呼んだのか何となく繋がった。
「ねえ、もしかして私が呼ばれた理由ってさ、私のアーツが関係してるのかな？」
「麻酔銃も最近効きが薄くなってきてる。今はフォリニック特製の睡眠薬を使っているが、これ以上強力なモノにすると体に悪影響を及ぼしかねない」

トーンを落として深刻な面持で話すドクター。
「……なによりもうこれ以上に手荒な手段をしたくはないんだ」
「そうね、なるべく穏便な解決を目指したいわよね」
「いえ、麻酔銃の時点で穏便じゃないんだけど」
ボソッと呟くウィスラッシュ。幾度か腕の時計を気にしていた動きを止めて突っ込みを入れるが、この場の者は誰も彼女の呟きを拾おうとしなかった。
（ドクターも少しは任せてくれればいいのに）
ドクターは皆に好かれていると思う。だけどいつも私達より先手を打ってしまって、私たちの出る必要が無かったりする。もちろんドクター以外も凄く優秀な人は沢山いる。でも私はいつも助けられてばかりいる。ドクターの戦術に、ドクターの厳しさに、ドクターの優しさに。そう思うと私がちゃんと役立てるのかそこはかとなく不安だ。こんな空回り気味な気もする頼み事だけれど、それでも少しでもドクターの役に立ちたい。と、腕時計を確認していたウィスラッシュが声をあげる。
「もうそろそろ着くころかしらね。あそこの自販機に職員がいるから聞いてみましょう。あら、あの照明点滅しているわね……」

「お疲れ様ですドクター！」
「作業お疲れ様」
　先ほどまで作業をしていたらしき二人の作業員と出会ったドクターたちは今までしてきたのと同じ質問をした。誰もが思わず（ドクター以外はだが）鼻を覆いたくなったが、一番目的地に近い人たちなので無視するはずもなかった。
「ドクター、こんな綺麗なオペレーターたちを引き連れてどうしたんです？」
「二人とも作業途中で悪いのだけれど、メイヤーさんを見かけなかったかしら？」
「あー、メイヤーさん……？」
「メイヤーさん？　見てませんよ」
「そう、ありがとう」
「あの、彼女に何か用ですか？　何か任せたい仕事とかあるとか？　そのような感じですか？」
「ええ、少し話したい事があって」
「どちらにせよ、あの人なら今はよしておいた方がいいですよ」
「え？」
「最近ラボにこもりっきりで、滅多に顔を出さないんですよ。なんでもミーボがとか改

造とかいって夢中になってるみたいで」
「その件について私たちは来たのよ」ウィスラッシュおばさんが言う。でもその言葉を聞いているのか聞いていないのか浅黒い肌のエンジニアはまだ話を続けている。
「ただその割には依頼もちゃんと受け付けていて、それが益々奇妙というべきか……ええ。この間入り口前に依頼の書いたメモと納品箱さえ置けば期日に完成品が届いたとか言う人がいて……」
脱線気味になっている彼の話を聞いていると、ふととある極東映画のイメージが思い浮かぶ。極地探検隊の料理人が昼食を載せたトレイをのドアの前に置いてその場を去っていくと、開かずの扉から白い手がぬっとそのトレイを引きずり込む。そして再び彼がやってくるとトレイの中身が空っぽになっている。そんな感じのことがあったかもしれない。しっかり依頼のものが出来立ての状態でラボ入り口に置かれている風景を見て、その人はどんな表情をしたんだろう。そう考えるとなんだかコミカルで面白いかも。
「実際にあったそうなんですよ！　彼女の顔も凄いもので。まるで何かが憑いていたみたいに……」
矢継ぎ早に話そうとするエンジニアの肩を、もう一人の職員が叩いた。
「もうその話はいいだろう。……すみませんね、お嬢さん方」

「いえ、大丈夫よ。ありがとう」
「そう言えば君は……えーと……」
「ブレナンです」
「ブレナンさんは塗れているみたいだけど何があったの？」
「ハハハ、お恥ずかしいことに。実は先ほどまでこの自販機の故障を直していたところでしてね、その時におっ被ったんですよ」
　グラベルの質問に、困り顔で頬を掻きながらブレナンは答える。
（先ほどからする甘ったるいような刺激臭との関連性とを指摘したかったけど、多分……そうよね……）
　その匂いはドクターにも感じられたらしく、ぼそりとこう言っているのが聞こえた。
「……『痺れる炭酸！　アシッドムシ味！』か……」
「ん？　なんか言いましたか、ドクター」
「あ、いや何でも……」
「そ、それよりその自販機の故障というのはどんなものかしら？」
　たどたどしくグラベルが尋ねる。
「グラベルさん？　私たちは今そんなことやっている場合では……」
「あー……うん。ええ、確かにそうね……。今のは何でもないわ……」

ウィスラッシュの軌道修正を受けて、次に何を聞くべきか考えているグラベル。すると、

（あれ？　ドクターは近くの自販機を見つめてどうしたのかな？）

その自販機はスカイブルーに染め上げられていて黒い廊下に調和するようなカラーリングになっていた。正面には「故障中」の張り紙が張ってあって、中もライトアップされていなかった。だが一点だけ妙な部分があった。

「ん？　その壊れた自販機というのはあれかな？」

ドクターが自販機に興味を示して近づいていく。

（あの自販機、一か所だけボタンが光っているわね……）

照明を落としているはずの自販機のボタンが何故か一つだけ光っているのだ。その光は普段通り見かけるもので間違いなかったが、自販機の状態からして普段通りでないことは明らかだった。

「ええそうですドクター。ただ……また何か不具合が起こっていますね……」

ドクターは自販機の前に立ちながら指を擦り合わせている。

「この自販機触ってもいいかな？」

「え？　え!?　でも！　いや、こ、これはまだ故障中で……」

ドクターは何を思ったのか自販機について興味があるようだ。「ドクター!?　そんな

ことやってる場合じゃないわよ!?」とウィスラッシュも制止の声をかけた。ブレミシャインもドクターのやることが釈然としなかった。叔母に続いて言おうと思ったがふと何か引っかかることがあったので、少し踏みとどまる。

（でも何だかドクターの行動が落ち着き払ってるような気がする。グラベルさんは……何も言わないの？）

横目で見ると、グラベルはただドクターの様子を見ているだけだった。よくよく見ればどこか余裕を持ったように見ているようだ。ブレミシャインは似ている眼差しを知っている。それはドクターがオペレーターたちを指揮している時に良く見せる、信頼の瞳だった。今でもドクターが職員たちを丸め込もうとしている時でもそんな瞳だった。

「あ、あのグラベル？　ドクターの事止めないの？」

「あら、別に彼女が止めてくれているならあたしが出る幕はないとおもうわ～」

「で、でもいつもドクターのサポートを率先してやってくれてる貴女が、ウィスラッシュおばさんよりも遅れるようなことはあるのかな……って」

「……どうしてそんなに気にしてるのかしら？」

（あ、あれ？　変な感じのコト聞いちゃったかな!?）

食い下がろうと無理やりに描けた言葉の「らしくなさ」に慌てる感情が追いついてく

る。それでも何か言おうとしたが、出てくるのは「えーと」とか「あの」とか用をなさない言葉ばかり。微妙な雰囲気になるように思えたがグラベルはそうではなかった。

「そうね～、『イイコト』、教えてあげようかしら」

そう言うと彼女の傍に歩み寄り、距離を少しづつ縮めていく。その足取りは公私の境界線を踏み越えて、なおゆったりともたせていく。さながら暗殺者かそれとも……。

「ドクターはいつも合理的な行動をとってロドスのみんなを支えているでしょ？　そしてたまに理性が無くなると奇行に走ったり変な言動になったりする。そう思うわよね？」

「うーん？　何となく全体としては合っているような気はするかなぁ」

ふとドクターの方を見やると自販機を確認している最中のようだった。急に自販機を調べたいと言い出して、今のミッションよりも優先させていく態度。騎士競技場レベルな贔屓の目で見ても意味のないミスリードで、結局最後まで意味をなさない行動ではないかとしか思えない。そんなものをあの神がかった布石を打つ指揮官が行った。これは一体どういうことなのか説得力のある説明する術を持たなかったし、かといってこれが全くの無碍な気紛れだとも思えなかった。だからこそ余計に気になって仕方がない。

「そう思うでしょ？」

　その時にはすでに彼我の間は二歩までに縮まっていた。グラベルは秘密が確実に一人だけ共有できるよう身体を半歩向けていた。ただ普段ならおでこ一つ分以上にある彼女の経験値の厚さに呑まれているはずのブレミシャインは、それ以上の興味から半歩身体を向けていた。そのため実のところは一歩分でしかない。
「……違うの？」クラミミがピンと前へ向けられる。
「うふふっ……違うのよ」面白い反応が得られたとばかりに微笑む。
「実はドクターって結構変わってるわ。あの人の傍にいたことのあるオペレーターたちなら分かるの。『あの人は面白い人だな』って」
　面白い人だから。
　確かにドクターの人となりとしてはその表現も分かる気がする。と、ここできて彼女の質問が自分の質問の意図を満たしていないことに気が付いた。ブレミシャインがもう一度彼女に聞こうとしたときには、もうすでに距離が離されていた。
「え？　ちょ、ちょっと？　本当にそれだけ、なの？」
「そうよ～」相変わらず微笑んだままそう答えたが、少しだけ考えた様な間の後にこう加えた。
「……でもアタシ以外にドクターの秘書を務めた人に聞いてみたらいいんじゃないかしら？　あなたの身近にいる人が一番聞きやすいかもね～」

「ドクターもう片付いたかしら！　終わったなら早く本筋に戻るわよ！　そこの二人も！　行くわよ！」
ちょうどよくドクターの寄り道が切れそうなタイミングと見たウィスラッシュが声を上げる。その声にすぐ彼女たちも向かった。
「ごめんなさい！　あ、お二人ともありがとうございます」
二人に向かってお辞儀をする。彼らもめいめいに返してくれたところでドクターたちに追いつくべく駆け足で向かった。

もうすでに合流したドクターはウィスラッシュに詰められている。
「ドクター？　寄り道しないで頂戴！　あなたのすべきことは一オペレーターの問題を解決することであってそれ以上でも以下でもないの！　しっかりなさいな！」
（うーん……なんだか叔母さんいつもより張り切ってる気がする。仕事じゃないのになんでだろ？）
何だかドクターに対する当たりが先ほどから強いように思える自分の叔母を不思議に見つめる。普段から厳しい性格ではあるが、それにしてはどこか普段通りではないと

思わしきズレを感じていた。だがそれがなんであるかがいまいち掴みかねていた。丁度ドクターの時の様に。ウィスラッシュが銀の腕時計を確認している。

叔母の違和感も気になってはいるが、それよりもグラベルに言われた件についても考えてみると一人思い当たる人物がいた。自分たちよりも先にロドスに来ていて、秘書を務めたこともあると言ってこともあり、自分たちに一番身近な人。

（マーガレットお姉ちゃんのこと、なのかな？　でも何で直接教えてくれないの？）

もう一度聞き返そうとも思ったが、きっとグラベルは上手くはぐらかしてくるだろう。現時点ではどうもできないだろうからしばらく後回しにしようとブレミシャインは決めた。そうしているうちにようやく目的地に着いたが

「扉の前……何かいるわね……」

ラボ・ルトラにはあの例のロボットたちが待っていた。

抜き放たれた鞭

数か月にわたり戦闘技術特化の指導教官として務めていると、さすがに愚痴の一つや二つは積もってくる。

「ブレイズ？　彼女は先週からいないわ。サルゴンの件は知っている？　テロ集団の攻勢が酷いからって何人かエリートオペレーターが出ていったのよ。ところで『グレースロートはブレイズの全てを知っている』って言ったの誰？　……大丈夫。ひどい目には合わせるわけじゃないから、教えてほしい」

普段、こんなときには飲み仲間と一緒にバーへ行くけど、あいにくとここ数週間あまり都合が合わない時期が多かったわ。

「うーん参ったなぁ。いえいえ！　同僚である貴女のコトですから、もちろん俺もご一緒したいですけど……この間飲みすぎたせいでドーベルマン教官にしごかれたんですよね。『ロドスを指導する立場であるというのを自覚しろ』って。あの時の教官と言っ

たら……申し訳ないんですが、しばらくは無しでお願いしてくれませんか？　あ、もしブレイズの奴に会ったらこう伝言して頂けますか？『今度やったらロゴス先輩に頼んで二度と酒が飲めない体にしてやるぞ』って」

　ロドスに入って飲みに行くほど仲良くなり始めた人たちとも、この時期を境に連絡を付けられなくなったのはとても痛かった。

「僕も貿易の仕事を抱えてしまっていて。すでにトランスポーターに頼んで荷物をクルビアに預けました。……申し訳ないのですがいつ帰れるかは現時点でお話しできません。ヤーカの兄貴……あ、マッターホルンもシルバーアッシュ様とサルゴンへ向かいましたので料理を振舞うことも出来ません……。本当に、残念ですが」

　軒並み伝手も無くなり、技術特化の指導も山場を迎えて、時折ドーベルマンからダメ出しを食らって。こうなったらバーテンダーでも相手に呑もうと思ったわ。カジミエーシュにいた頃にいつも世話になってたマーティンはロドスにはいないけど、ロドスのバーテンダーともそれなりに仲良くしてたから。そんな忙しい時ドクターがそばにいてくれたの。

「おはようウィスラッシュ。今日も仕事か？　。……一緒に頑張ろう」

ドクターとは少し交流があった。たまにお買い物の荷物持ちに付き合ってもらったりしてもらったけど、この頃になるまでは余り接触することはなかったわ。

「正面いいかな？　……ウィスラッシュ、仕事で何か困ったことがあったらいつでも相談してくれ。仕事以外でも構わないよ……なんちゃって。……あぁ、確かに同じ定食だね。たまにはしっかり栄養のあるものを食べないといけないからね。……なるべく食べるよう善処します。ん？　あれドコ見て……時間か。大丈夫だったかな。……貴女には余計なお世話か」

朝の廊下で、ロドスの食堂で。書類を抱えた姿で、フォークを持った姿で。息抜きの時間に会うドクターはやや世話を焼きやすいタイプなのか、よく私に関わってきた。普段はドクターの緩んだところを厳しくしめてるけど、オフの時はオフで別。その言葉も優しいながらも真っ直ぐなもので、それが励みにもなり好ましくもある。気が付いたらいつもの厳しい態度が解けている時もあったわ。

「あれ、ウィスラッシュでも医務室に来ることもあるんだね。……ほう、そうか教え子の手当てか……。でもキミのことだからしっかりやってくれてるんだろう。お陰で我々も厳しい状況でも立ち向かえる。いつも感謝してるよ、ありがとう。……？　何故私がここにいるのかって？　えーと、アレだ、ドクター機密という奴で……あ！　私の健診表じゃないか！　いつの間に!?　……運動不足以外は至って健康なんだからいいだろ

う！　大丈夫だから返して下さい！　お願い！　なんでもしますから！」

しばらくするとドクターの傍に居るとき居心地の良いことに気が付いた。きっと人格者のオーラがにじみ出ているのでしょうね。雰囲気から仕草、言葉にただならぬものを感じる。なんと表現すればよいか……しっくりするものではないけれど、一番近いのは「暖かい」かしら。それでもまだ足りないのだけれど。

それにしても不思議。初めて出会った時は「どうしてこんな不審者じみた人にマーガレットは付いていこうと思ったのかしら」とすら思っていたのに！

段々仕事が様になり、ロドス号の運行の様に安定してきたある時、ドクターは私に知らせてくれた。

「こうなったのは私のせいだね。あぁ……サルゴンの件は知っているだろう？　本当なら私も行くつもりだった。だが……私の盟友に上手くやり込められてしまったよ。『休めるときには休め盟友よ、私を満たしてくれる語らいをする者はこの大地に多くないのだから』……ハハ、そうゆうことだ。もし君が私の立場だったら彼に惚れてしまっただろうね。あれは反則だよ！　……そう思うだろう？　フゥ……何故盟友という言葉が友人とは違った響きを持っているのか、それがよく分かったよ」

その頃サルゴンの方では汚染された生物兵器を持ったテロ集団がサルゴンのロング

スプリングを脅かしていた。当然そこにあるロドスの事務所もその危機にさらされることになる。もしこの事務所が潰れてしまえばロドスの事業目的の大きな支障となってしまう。そこで業務が忙しいドクターに代わりサルゴン方面の局地的な指揮官補佐としてシルバーアッシュが立てられた。その彼の選抜メンバーの中には私の飲み仲間もたくさんいた。ドクターが話したのはそういう事だったの。

「本当に申し訳ない。ただキミにも分かっているだろうけど……伝えておきたくてね」

そんな言葉を聞いたところで、今更不満を抱く材料にもなりはしなかった。ただカランドの盟主の話を聞いてから、もやっとしたものが私の胸に湧いてきた。透明な水槽に黒灰と白の濁った水煙がしたたり落ちてきた様な、その煙がドクターを渦巻いている様な、そんな気分。おもむろにドクターが立ち上がる。

「そうだ、今日この後空いているかな？　もし良かったら一緒に夕食でもどう？」

彼からディナーの約束を持ちかけられた時にはとても嬉しかった。でもその日は爆発騒ぎがあったとかで自然と立ち消えになってしまったわね。

「キミに渡したいものがあるんだ。これ、銀の腕時計だ。ウィスラッシュは銀のイメージがあるから、似合うと思ったんだが……。そうか良かった」

教導官としての特別スケジュールが峠を越したとき、突然ドクターからプレゼントを

渡された。中身は銀色の腕時計。疾走する精悍な馬の意匠が施され、栗色をした本革のベルトが特徴的な時計。

（なんで私に？）

メーカーの名前は全く聞き覚えの無いもの。でもこんなタイミングでこんなプレゼントを……何故？

「あれ、覚えてないのか。ロドスに来て半年になるからお祝いにと用意したんだ。このくらいの用意しかできなかったが許してほしい」

半周年祝いの品、ということだろうか。

「本当なら数日後に渡したかったんだけど、急な予定が入ってね。……少しサルゴンの方に行く」

ロドスの最高指揮官が盟友と呼ぶ彼も手の付けようのない事態が起こった。そのためにドクターも急遽サルゴンへ向かうこととなったという。

「いつ……か。現場を見ないと分からないが……一週間前後はかかるかもしれないな。急なものだから、キミに知らせる必要があった。不意打ちにいなくなったら悲しませてしまうと思ってね。……すまない冗談だ。……ゴホン。つまりそういうことだから、もし相談したいことがあったらいつでも知らせて欲しい」

普段通りを装っていたけれど、この時は確かに寂しかった。ドクターとしばらく離れ

てしまうことは、あの暖かい感覚が遠ざかってしまうようで少しつらいと思った。だから悲しませるだろうってドクターが言ったことにすぐ反応したんでしょう。ちょっと考えれば普段から聞きなれた軽口のはずだったのに。

「大丈夫だ。戻ったらバーでこれまでの労苦を労うことにしよう。その時はこれまでお預けだった仲間たちとだ」

差し出された手を握った時ドクターが痛そうにしていたことはよく覚えている。

（もう、次から次へと……）

結果からすると、またしても約束が果たされることは無かった。事件の重要性から予想していた期間を3日繰り上げて事態を鎮圧することに成功しサルゴンにおけるロドスの事業は安定を迎えることとなった。代わりに後始末を付けるべく各方面へ手回しをするため追加で1週間は掛かりきりで執務室に籠っていた。サルゴンの鎮圧にかかった日数はトータルで4日延びたことになる。そこに私と飲みに行く約束は後回しにされるのも無理もないことでしょう。

（確かにそうなのでしょうけれども……）

それにしたって一体ここまで邪魔してくるのはどこの誰なのかしら。今だってこんなみょうちくりんのヘンテコロボットに邪魔されているし、前はサルゴンのテロリストが邪魔をしていたわね。その前は？　あの大爆発騒ぎでしょ？　確かとある研究室の爆発から連鎖的にロドス艦内に起こった一通りの爆発騒ぎ。その前も確か……いいえ、ドクターの招集はちょっと違うわね。あれはノーカンよ。

その件を除くにしてもドクターとの飲み約束はことごとく消されてしまった。独りで飲みに行くのでもいいが、やっぱり気の置けない人と飲むのとマスターと飲むのは全く違う。私の気持ちは早いところこの茶番を終わらせて、次こそドクターの頑張りを労ってあげるの。

「ミーボたちが先行しているみたいだ」

「うへぇ……。本当にあのメイヤーさんがあのデザインを？　私でもちょっと引くよ……」

「あらあら『ちょっと』なのね～。貴女、さっきまでビクビクしてたのに『ちょっと』なの？　もしかして機械マニアにしか分からない美学みたいなものがあるのかしら？」

「うーん……精神攻撃レベルってほどでもないかな？　でもあんな見た目でも遠目から分かるくらいメイヤーさんのこだわりは凄いよ。例えば……」

その横ではマリアたちの話が聞こえる。とうとうとあの妙なロボットに対する考察を話しているようだが、少しも機械に詳しくない私はただその思いをよそ行き顔で聞くしかできなかった。そんなことよりも気になることがある。

「ねえ、メイヤーはどこ？　あのロボットたちと一緒じゃないみたいだけど？」

「先行させているのかも」

「何のために？」

「うーん、今の状況じゃわからないね」

「自律モードに入っているのか。もしスレイブモードならあんな動作はさせない」

「でもわざわざこんなところで遠隔操作というのも変じゃない？　もし目的が私たちの不意打ちだったらこんなところで待っているはずないもの」

「でもこれはチャンスじゃないかしら？　いまならロボットの不意を付けるわ」

「そうねおばさん！　メイヤーさんがこの場にいたら多分もっと苦戦してたと思うよ！」

「ドクターも問題ないかしら～？」

「……大丈夫だ、問題ないだろう」

「ドクター？」

ドクターの返答が少し間を含んでいたところからメイヤーの不在について考えを巡

らせているのは明らかだった。こんなものでも完璧を求めようとしているのね。でもそんな考えすぎなところがドクターの良いところで悪いところよ。そんなことは言うまでもなくドクターは私に首肯する。

「分かっているさ。……頼んだよウィスラッシュ、ブレミシャイン、グラベル……今のところ相手は三体でこちらに気付いていない。扉に向いているすきに全て倒せ」

「了解ドクター！　あ、ミーボが帰っていくよ」

マリアがそう言うと、確かにミーボたちが向こうの方へ行く姿が見えた。誰が言うまでもなく私たちは駆け出す。ドクターから見れば瞬間移動でもしたみたいに思うだろう。そして向こうが気付いた時には私たちは既に攻撃できる位置にいた。

一体目はグラベルの双剣が仕留める。奇襲に気付いて対応しようとした頃には装甲の合間から内部を突き刺されていた。急所だったのか特に抵抗もなく沈黙した。だが残りの二体が奇襲に気付くとすぐさま目を赤く光らせ、

「逃げた!?」

すぐさま奥の通路へと走り去っていった。でも簡単に逃しはしない。

「随分としつけがなってないわね！」

教鞭用の鞭を抜き放つと素早く繰り出し、先頭を走る一匹の左足に絡ませる。そしてそのまま力一杯に釣り上げた。

「いくわよ！・マリア！」
「私に任せて！」
　後を走っていたミーボを巻き添えにして引き戻されると、そのままマリアの構えた盾に頭からぶつかった。より破滅的な微笑みになった機体は地面に弾んだところで光のアーツを纏った剣に切られ、大人しくなった。
　残った一体はひっくり返っていた胴体を元に戻そうとしたが、足をジタバタさせるだけで上手く起き上がれないようだった。
「手伝ってあげるわ」
　いつの間に追いついたグラベルは両脇に双剣をすっと差し込み上へと投げ上げる。クルクルとされるがまま宙返りしたカワウソは見事に着地した。その様を見て体はすぐさま逃げ出そうとしたが直後にバランスを崩して倒れこんだ。そして二度と動くことはなかった。
「見事なものね」
「ありがとう。貴女も随分柔軟な戦い方をするわね～」
　振り切った剣を下ろすと斬られたトーマスの首が落ちる。
「私も鞭を使ってみようかしらね～」
「私もよ～。あなたがその剣をどう扱っているか、た～いへん興味があるわね」

（一体目を仕留めるとき、彼女は装甲の隙間から急所を狙った。音に探知して振り向こうとした瞬間で、隙間が余り見えないような角度。それを一突きで。しかもさっきのも随分手慣れた様子だったわね）

「あらそう？でも思っているような使い方ではないから心配いらないわよ。ドクターの下に集う同胞としてね」

「二人とも何の話をしてるの？それよりグラベル凄いね！あんな剣捌き初めてだよ！」

「ふふ、褒めてくれてありがとう。でもそんなものでもないわ。そうでしょ、ウィスラッシュ？」

「謙遜のつもりか知らないけれど、腕前はいいと思うわ」

「違うわよ～、こいつらのことよ。奇襲とはいえ動作が明らかに鈍いし、すぐさま逃げようとした。ドクターの話で聞いたものよりも弱いわ」

「確かにそう。でもこれがメイヤーによる罠だとしても、先制しようとしたグラベルを爆発に巻き込むこともしないなんて中途半端すぎね」

「でも予備隊はやられていたよ！医務室で話を聞いたら半分が拒絶反応を起こしたし、アンセルくんはパニックになって私に抱き着いてくるくらいだったし」

「薄暗い工場であの顔を見たらマリアもああなるんじゃないかしら？」

「……そ、それは無いと思うかな～！なんて……」

想像してしまったのか突然目が泳ぐマリア。クラミミもペタンと伏せっている。この子は昔っから結構なビビりだから、怖いことがあるとこんな顔になるのよね。
「と、とにかく!ミーボたちが逃げようとした先に進んでみようよ!きっとメイヤーさんもいるはずだよ!」
『いや、恐らくそれは無いだろう』
「ドクター!?なんで通信で?」
『みんなが行った後、すぐに臭い人……いやブレナンが私に知らせてきて今向かっている所だ。なのでこうして話している』
「急すぎるわね!あなたが襲われたらどうするのよ!」
『大丈夫だ。今アズリウスから連絡が入ったんだが君たちの進む先に多くのミーボたちが集まっているようだ。どうやらラボ・ルトラへ向かうらしい』
「あらあら、団体様のお付きね。一体何があるというのかしら?」
『現時点では。だがもしかしたらそれも分かるかもしれない』
「ねえ、ドクター。一体どこへ向かっているの?」
『ここの2層下、お遊戯室に向かっている。エンジニアのサイドがそこで……』
「ごめんなさいドクター、先客が来たわ」
グラベルの視線が通路の奥に行く。そこからはスリーマンセルを組んだトーマスの

群れがこちらへやってくる。全員一律に目を光らせてやってきているのが見えた。
「ドクター、また後で知らせて頂戴。私達は連中を足止めさせるわ」
『任せたよウィスラッシュ。頼りにしている』
　そう言って通信は切れた。改めて教練用の鞭を構える。
「マリアは前面に出て彼らをブロック、グラベルは適宜攪乱を。私はマリアのサポートに入るわ！」
「ゾフィアおばさん！」
「マリア、あなたは大丈夫だと思うけど敵はまだ何かあるわ。警戒なさい！」
「ええ！相手は肩回りが弱点だよ！多分おばさんならカバーを避けて駆動部を攻撃できるよ！」
「首元を一撃でも構わないわよ。あそこは人間でも斬られたらひとたまりもないからオススメよ～」
　それぞれの騎士が武器を構えて待ち構える。防衛線まで残り僅かな所にまでミーボは来ている。
「調教の時間よ！」
　私は素早く鞭を抜き放った。

ちぐはぐなボディ

ＰＭ０１：４２
ロドス号　セクター「ＲＩ－７」

「ドクター、こちらです」
「サイドはどこに？」
「この辺りで待っていると言っていましたが……あそこです」
　指さしたところには確かにあの作業着のサルゴン人がいる。自販機で作業をしていた時とは違いジャケットは脱いで床に置いてある。いや、誰かに被せられている。
「連れてきたぞ！　サイド！」
「……あ、来てくれたんですね」
「急にドクターを呼んでほしいって言われたから何かと思えば……医療部に知らせればいいだろう？　わざわざ……」
「すみません。でもこれはドクターたちに知らせておいた方がいいでしょう。それに、これは倒れているんじゃないんです」
「ん？　だがこれはどう見ても倒れているだろう？」

「……寝ているな」
「寝ている？」
「流石ドクター！　よくお分かりになりましたね……」
「よく世話になっているからね……」
　屈んだドクターはサイドににべもなく返す。とはいえ見た目は行き倒れているようにしか見えない。くの字の体勢で涎をたらし、床に横たわっていたら誰でもそう思うはずだ。
「見た感じ技術者か？　二人ともこの人を知っておいでで？」
「ええ、この人は……その……」
「……優れた技術力とアイデアを持つメカニストだ」
「そうです。そしてドクターの今関わっている事件にとても役立つと思いまして！」
「技術者さんがこんな所で午睡をとっているとは……、とんだ社畜……いえ、非常にお疲れのようですね。ですがその……立てますか？役に？」
「できるだろう」
　寝息を立てていることを確認しながらドクターは尋ねる。
「どうやって見つけた？」
「修理が終わった帰りに見かけたんです。まさか廊下で倒れているだなんて。それです

ぐにブレナンさんにドクターを連れてくるよう頼みました」
「ファインプレーだよ、サイド。ところで彼女を起こそうとしてないよね？」
「いえ、起こそうとしました」
「え？」
「……え？」
　思わず見つめ返したサイドは確認しようとする。ひょっとして余計なことをしてしまったんだろうか。そう思っていそうな反応だった。
「いえ、あの、えっとですね……メイヤーさんを揺さぶって起こそうとしたんですが一向に起きないんですよ。それで大変失礼ながら肩を叩いて起こそうとしたんですけどダメでした。それでドクターが来るまではそのまま待っていたんです」
「起こさなかったのか。それは良かったよ」
「……ドクター？　いったいどういう事なんですか？」
「ブレナン！　さっきの作業着を貸してくれないか？」
「……？　ええ、いいですけどどうするおつもりで？」
　一体何をしようとしているのかよく分からないとサイドがドクターを見ると、先ほど殺人飲料がかかった作業着を腕にぐるぐる巻きにしている。
「二人とも離れていてくれ。これからメイヤーを『起こす』」

「『起こす』？」
訝しんでいる中、ドクターは作業着を巻き付けた腕で頭を抱きかかえようとした。
ガブッ！
「うわあぁぁ！」
先ほどまで寝ていたメイヤーが瞬間、ドクターの手に噛みついた。凶暴猟犬もかくやのすごい力で噛みついており、噛まれた腕からはギリギリという音も漏れてくる。
「うえっ！　何これ！」
しばらく噛んでいた腕からぱっと離れて、床に倒れた。あまりに衝撃的な一連の流れに、外野は呆然としていた。えずいているメイヤーを脇目で見ながら作業着を返していくドクター。
「ゲホッ！　ゲホッ！」
「これだからキミをベッドへ寝かしつけるのはやめたんだよ。作業着をありがとう」
「……は、ハイ」
「……ッ！　……――ア！　ゴフッ！」
「さ、さすがはドクターですね……感服します……」
「そろそろ聞きたいんだがメイヤー……。あー、もう少し待つか？」
「グフッ……ッ……ハァ。あーもう！　死にかけるとこだったー」

這い蹲っていたがようやく落ち着きを取り戻したメイヤーは、注意深く周囲を見回す。
「あれ？　ドクター？」
「そうだ」
「どうしてここに？」
「私が聞きたいよ……一体どうしてこんなところに？」
「こんなところって……あれ!?　ウソ！　ラボじゃない!?」
「嘘じゃない。さっきまで訓練室にいて、それからロドス艦内を歩いていたんだ。ミーボと一緒にだ」
「最終調整しようと思ってそれで……」
「それから先の事は？」
　座りなおししばらく顎に手をあて唸っていたが、
「う～んダメ、全然思い出せないな……」
「この前私が来たときは？　今日訓練場であったことは思い出せるか？」
「この前？　確か珍しくドクターがお昼に来た時だよね？　普段なら夜遅くだったりするからよく覚えているよ！」
「お昼？　あの時は深夜帯だぞ？」

「いやいや！　そんなことないって！　だってあの時は1時……あ、そうかあの時ＡＭなのか。ＰＭじゃなくて」
「あの時最後に私が言った言葉を覚えているか？」
「えと、『期待しているよ。君は大事なオペレーターだから』。だよね？」
「スゥ――――」
「アレ？　ドクター深呼吸？」
「ウルサスの皇帝であろうと解決できなさそうな問題が見つかっただけだ」
「それにしても人間の認知能力って不思議だよね！　忘れていたことを何かの拍子に思い出したり、逆に……」
「覚えているはずの事を覚えていなかったり、か」
　そういって微かな瞳が伏せられる。伏せるバイザーがメイヤーの瞳を映した。目のハイライトは戻ってきているが、瞳孔にはまだ異常が残っているようだ。左右の瞳孔の開き具合が異なっていることにドクターは気付いていた。
「頭は大丈夫か。これからミーボを止めるために使ってもらうぞ」
「え？　ミーボって？　あれ、どうしていないの？」
「どうして？　……まさか君が、ミーボをどう改造したか忘れたわけではないよね？」
「それはないよ！　ドクターのお陰で出来た様なものだし……ただちょっと思い出す

きっかけがないと難しいよ。……今回のミーボは『特別製』だから」
「私のお陰？　『特別製』？」
　ドクターが右手を擦りかけた時、小走りで駆け寄ってきたブレナンが話を遮ってすぐに話す。
「ドクター、お話の途中失礼しますが向こうに……」
「来た！」
　サイドの悲鳴があがる。見るとロボット犬のようなものがこちらへ走り寄ってきている。
「ドクター避けて下さい！」
「え！　ミーボ!?」
　素早く走ってきたのはあの機関車の頭を付けたメカカワウソだった。赤く目を光らせた姿はまさに殺戮機関車のソレである。目の光が残像を残すほど素早い身のこなしでブレナンへ飛び掛かった。身体を打ち付け、重い機体がのしかかる。馬乗りにされた者の前にはあの顔が笑っていた。
「何っ！」
　まずトーマスの顔が内側に隠れた。次に黒い円筒部分が細かく分割され首元にしまわれる。そして機関車の頭があったところには犬の骸骨のような黒い大顎が現れた。

至近距離でその変貌を見届けたブレナンは驚きの余り言葉を失っていた。顔が痙攣し、口が言葉を拒む。そんな様子に対して大顎は大きく広げ目の前で噛み鳴らした。ガキッと軽くはないその響きにようやくブレナンは恐れを思い出した。

「わわっ！　噛みついてくるっ！」

「メイヤー！　ミーボを！」

「え？　これ？！」

これ以上来ないように頭を抑え込むが、ロボットは止まらない。ゆっくりと着実に首元へ迫っていた。メイヤーの目が指の隙間で白黒させている。

「助けてくれ！　やられる！」

「急げ！　とにかく止めろ！」

「あぁぁ……待ってドクター！　今停止スイッチを入れるから抑えてて！」

ドクターが抑え、メイヤーが止めにかかる。彼らの接近を察知したミーボと呼びたくないナニカは素早く飛びのき距離をとった。

「やばい！　サイド、来るな！　離れてろ！」

「あれ？　何かヘンじゃない？　私のミーボ！」

「最初から狂ってたろ！　言わなかっただけで！　ほら今も！」

距離を通ったミーボの胸元が光り出した。よく見ると光を放っているのはさっきま

で顔だったところだ。顔全体の隙間という隙間から赤い光が漏れ出ているさまは軽く恐怖ですらある。と、何の前触れもなく突然変形を始めた。

まず胴体が進展する。それに続いて小さい前足が変形し大きな腕の形の装甲を展開させる。その次には後ろ足が立ち上がり、二倍ほどの長さになる。そして装甲が包み込むように変形を完了した。

変形ミーボはややもせずに立ち上がった。その見た目はまさに……

「人型ロボットだと!?」

小人サイズのロボットがそこに立っていた。ドゥリン族サイズの青っぽい体に黒い大あごを装着した出で立ちはどこかロボット映画を想起させる。そうだ、確か極東の映画だ。某司令官の息子が乗る巨大メカに似ている。

「やっぱりメイヤーはどこか代償にしてるところがあるな?」

「へ?　何言ってるのドクター!?　いやそうじゃなくて!」

膝をついた状態のミーボを見たメイヤーが警告を発した。

「突っ込んでくる!」

クラウチングスタートを切った違法改造ミーボは恐ろしい瞬発力で彼らの懐へと飛

び込む。そして辺りが光と衝撃に包まれた。